

神奈川県立博物館研究報告

－人文科学－

第47号

【論文】

- 渡邊 浩貴 初期鎌倉幕府の音楽と京都社会
 —「楽人招請型」の音楽受容とその基盤—…………… (1)

【資料紹介】

- 戸田 哲也・中山 豊・千葉 毅
 横浜市十王堂免遺跡の縄文時代礫斧
 —林國治氏旧蔵資料—…………… (23)
- 梯 弘人 九月廿三日付北条氏規書状について…………… (57)
- 古宮 雅明 富士山宝永噴火被災地への幕府の救済活動に関する
 未紹介資料…………… (65)
- 根本佐智子・古宮 雅明
 松平造酒助江戸在勤日記
 —慶応元年閏五月九日より同八月十一日—…………… (77)

2020

神奈川県立歴史博物館

【資料紹介】

横浜市十王堂免遺跡の縄文時代礫斧

— 林國治氏旧蔵資料 —

戸田 哲也
(玉川文化財研究所)
 中山 豊
(玉川文化財研究所)
 千葉 毅

【キーワード】

縄文時代 石器 礫斧 十王堂免遺跡 赤穂原遺跡 林國治

【要旨】

神奈川県立歴史博物館が所蔵する横浜市十王堂免遺跡採集の縄文時代礫斧を報告する。これらは一九五〇年代後半に、在野考古学研究者の林國治が採集した資料群である。

十王堂免遺跡採集の礫斧は、完形品・略完形品が三七三点、破損品が三七点、合計四一〇点が収蔵されている。本稿では完形品・略完形品を対象に、刃部の作出部位、作出手法（打製・局部磨製）、作出面（片刃・両刃）および礫斧のサイズといった点で分類を行い、一八二点を図化した。

一遺跡における撚糸文期に伴う礫斧として、現在知られている資料の中で最大点数となる石器群であり、礫斧形態の全容がうかがえる基準的資料と言える。

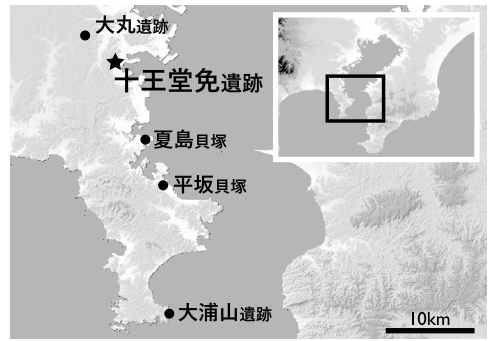
はじめに

神奈川県立歴史博物館の前身である神奈川県立博物館は一九六七年に開館した。そのころ、今日のような行政による埋蔵文化財保護体制は未整備であり、県内では行政機関が保管する考古資料はほとんどなかった。そのため、一九六三年に設置された博物館準備室では、県内で活動していた在野の考古学研究者や収集家から積極的に資料を購入し、寄贈を受け入れることでコレクションの充実を図った。開館前後に受け入れたこれらの資料群が、今日においても当館が所蔵する考古資料の多くを占めている（千葉二〇一八）。現在、当館ではそれらの整理作業を進めており、順次報告を行っている。

本稿では、横浜市十王堂免遺跡採集の石器群のうち礫斧の報告を行う。本資料群は、一九五〇年代後半に在野考古学研究者である林國治によって採集されたもので、一九六六年に当館に収蔵された。（千葉）

一 資料群と遺跡の概要

十王堂免遺跡は、現在の横浜市磯子区汐見台に存在した遺跡である（第1図）。横浜市南部を主なフィールドとして考古学的踏査、採集を重ねていた林國治は、一九五四年四月に初めて十王堂免遺跡を訪れ、それ以降度々踏査、採集に赴いている（林一九七七・一九七九）。特に、当時の考古学界において「最古の縄文土器」としての撚糸文土器の探求が盛んに行われていた中で、十王堂免遺跡からも当該期の所産と考えられる土器群が多く採集されたことが注目された。芹沢長介は一九五八年に林の採集資料を実見、本遺跡の重要性を認識し、同年、林の仲介によって発掘調査を行っている^①（芹沢一九六二）。



第1図 十王堂免遺跡の位置

しかし、本遺跡を含む一帯は、一九六〇年代以降の開発に伴い大規模な造成工事が行われ、事前の記録保存調査も実施されないまま、本遺跡も消滅した。そのため、今日では林による採集資料群は本遺跡を知るために欠くことのできないものとなっている。

林による十王堂免遺跡採集資料群のうち、土器については燃糸文期のものを中心にすでに報告した（千葉

二〇一六、以下「千葉前稿」とする）。報告した土器片数は、燃糸文期前半の土器片八六点、大浦山式土器二六〇点、東山式土器二二点、無文土器二八六点、早期後半の土器片一〇点、草創期隆線文期の可能性がある土器五点となり、数量だけでも本遺跡が当該期の遺跡として大規模なものであったことがうかがわれる。

本稿では、これらの土器群に伴う石器群のうち礫斧を報告する。これらの石器群は、前述の土器群と一括で保管されていたものであり、燃糸文期に伴うと考えられる。多くの石器にみられる注記に記された採集時期も共通する。

芹沢長介による大丸遺跡出土例の報告以来、礫斧は当該期石器に特徴的な存在として認識されてきた（芹沢一九五六、岡本一九六五、宮崎一九八一など）。原田昌幸は「その形状、構造は、まさに弥生時代の木工具、扁平片刃石斧に酷似する」とし、礫斧の隆盛時期が竪穴住居の普及・分布拡大に時空間的に一歩先行した形で認められるという点から、特に竪穴住居の構築との関係の中に礫斧を位置づけている（原田一九八八）。

礫斧は加工が少なく、形態的特徴に乏しいため分類しがたく、分析事例もあまり多くないが、最近、筆者らのうち戸田・中山は藤沢市江ノ島植物園内遺跡の出土事例七三点を対象として分析を行った（戸田・中山二〇一九）。加工範囲および刃部の剥離・作出手法（打製、磨製）により分類、数量を比較することで「磨製と打製に形態差が全く無い」ことを指摘し、それにより両者に「機能差を求めるとはできない」こと、また出土量の多さ、刃部破損の少なさ、出土する遺跡の立地（内陸部の台地、低位丘陵地帯に広く分布）等から、植物性食料の採集に関わる土堀り具としての用途を想定した。根茎類の採集・掘削等に用いられたとされている棒状木製品「掘り棒・尖棒」との先端部幅の類似も指摘したところである。

本報告では、これらの分析視点を踏まえつつ、当該期遺跡が多く分布する東京湾西岸の中でも有数の規模と考えられる十王堂免遺跡での礫斧の基礎的な情報をまとめることで、当該期の基準的資料の一つとして整備したい。

なお、林による採集の経緯、経過、遺跡の位置等については千葉前稿に整理したのでここでは省略する。また、林の採集資料には燃糸文期に属すると考えられる多量のスタンプリ形石器のほか、中期中葉、後葉の土器片も整理箱一箱含まれるが、これらについては未報告である。

本石器群の観察と分類は戸田を中心に三者で行い、実測図化、写真撮影は玉川文化財研究所の協力を得た。執筆は戸田・千葉が行い各項目末に記した。石器計測、観察表、表1～5は中山が分担した。（千葉）

二 礫斧の分類基準

十王堂免遺跡採集の礫斧の分類にあたっては、近年の先行研究となる藤沢市江ノ島植物園内遺跡出土の礫斧について行った分類に準拠したいと思う（戸田・中山前掲）。

その江ノ島植物園内出土礫斧の分類では、礫斧の素材となる縦長の扁平な中〜小自然礫の形状をそのまま用い、先端部への剥離（刃部加工）を施す1類と、素材礫の先端刃部加工のみならず、周縁部あるいは裏面にまでも剥離を施す2類の大きく二つに分類した。なお先端刃部は片面加工の片刃となるものが圧倒的な主体を占めているが、刃部両面加工（両刃）となるものが少ないながら一定量を占めていた。

そして刃部の観察からは、1、2類それぞれの中で打製手法のみで刃部を形成するA種と、刃部先端を中心に研磨する、局部磨製手法（以下、省略して磨製も用いる）のB種の二者に細分したのである。

このような分類基準のもとに十王堂免採集礫斧においても1類A種（自然礫の形状を残し、先端部打製刃部となるもの）、1類B種（自然礫の形状を残し先端磨製刃部となるもの）、2類A種（周縁加工が施され、先端部打製刃部となるもの）、2類B種（周縁加工が施され、先端部磨製刃部となるもの）の大きく四つのグループに分け、さらに量は少ないが両刃を呈するものおよびこの後に述べるL字状加工のものを小分類して図版を構成し、観察記述を進めていきたい。

なお、江ノ島植物園内遺跡の分析では、基本的にこの四つの分類を行いつつ、派生的に各類に認められる①素材礫の形態差、②礫斧の大小（長径）、③片刃と両刃の数量、④刃部形態にみる凹刃・直刃・ノミ状等の存在、という各点についても観察上の記述を行ったが、安定的数量に達し

ないもの、あるいは截然とは分類し難い中間的形態の存在もあり、明確な分類項目を設定するには躊躇された。

しかし今般の十王堂免遺跡採集の礫斧は、完形品三七三点という江ノ島植物園内遺跡の六九点を五倍超する総数量を分類することにより、前述の江ノ島植物園内遺跡の分析において言及した各小細分要素についても、ある程度の数量的まとめりとして捉えることが可能となった。具体的には、完形品三七三点あるいは実測図化した一八二点について②とした礫斧の大小（長径）と重量、③とした両刃の観察と分類、④とした刃部形態の「平・曲刃タイプ」、「尖・細刃タイプ」の二者とする分類、を行いそれぞれ数量化することができた。

礫斧細別にあたって②とした礫斧の大小についての基準としては最大長（長径）をもつて分類しており、大形品は一〇cm以上を測るもの、中形品は八〜九cm台、小形品は七cm台およびそれ以下のものとし、加えて実測資料を基に大、中、小形の平均重量を算出した。なお、江ノ島植物園内遺跡の小分類では七cm台を中形品に加えていたが、本遺跡では小形品とする区分に変更した。

③については十王堂免資料を分類する中で、刃部を両刃とする例が打製（1・2類A種）、局部磨製（1・2類B種）の4つの分類項目全てにそれぞれ一定量存在することが明らかとなり、礫斧の研究上新たに両刃の分類項目を設定することとした。

なお両刃には、表裏同程度の刃部加工を施す蛤刃状のものと、表面への刃部剥離が多く、大きく作られ、裏面の刃部加工が小さく少ない、片刃状のもの2種が認められる。前者は目的的な両刃製作と考えられ、後者には片刃状の両刃を目的としたものと、片刃使用の後に裏面に加工を加えた片刃↓両刃への刃部再生品の二者が含まれているものと考えられ

るが、明確には区分していない。

④とした刃部形態については、尖刃・平刃・曲刃・偏刃等のこまかい差異を認めることができるが、大形品を除き礫斧の大部分において先端刃部幅が5cm以内に収まる範囲での刃部形態差であることを考えると、実際の使用においてどの程度の機能差がありえたのかは疑問のところもあり、また区分の難しい中間形態もあることから、本遺跡の礫斧を分類するうえではあまり細かい刃部先端の形態分類は行わず、大きく次の二種に分けることとした。

平刃と曲刃は幅広の刃部を作り出すが、中間形態もあり、「平・曲刃」としてまとめ、ノミ状とも呼ばれる尖刃および細身の礫を選択して自ずと細い刃部を作る細刃は、「尖・細刃」としてまとめることとした。この二種は前者が長円形・楕円形の礫を用い、後者は棒状・細身の礫を用いるという素材の選択から見て、あらかじめどちらかかの刃部を作ること念頭に置いていたことが推測されるのである。なおこの二種は、数量差はあるが大形・小形の各サイズに存在することも礫斧の基本的な特徴となるものである。

なお本遺跡の礫斧の観察分類から、新たに2類A・B種において先端の刃部加工に継ながるような片側縁に広く剝離を施し、L字状を呈する加工を行うものが特徴的に見い出された。実測図の分類において区分をし、数量的にも捉えることとしたが、L字状の加工はあくまでも2類の周縁加工のバリエーションとして捉えられるものであり、現段階では別種として分けるものではないと考えている。

さらに刃部の基部側となる逆端部にも刃部加工が加えられる両端加工例が少量認められる。しかし礫斧と規定するものは前述のように礫長軸の片端に刃部を形成するものが圧倒的な主体となることから、着柄的に

も機能的にも片端利用の石器と考えることができる。したがって逆端部への刃部加工は、二次利用としての新たな加工と考えられるものであり、再利用と表現しておきたい。なお個体数を前提とする今回の数量分類にこの再利用片端部は加算していない。

以上ここまでの解説のもとに分類別の点数を表1、表2としてまとめ、このあと礫斧の説明を行うが、石器実測図(縮尺1/3)では刃部加工を施す表面実測図と、裏面に加工のある場合に裏面実測図を掲載した。また石器実測図に同大の写真を合成した。石器写真は表面と刃部正面を基本とし、裏面の写真は図版構成上割愛したものがあつた。(戸田)

二 十王堂免遺跡採集の礫斧

本遺跡より採集された礫斧は欠損品も含め総数四一〇点を数え、その内訳は完形品あるいは準完形品計三七三点、欠損品三七点となる。完形品三七三点の中から、前述した各類別を代表する一八二点(完形品の約半数)を図化し、第2図～第15図として掲載した。なお欠損品は分類が不可となるものであり、集計には加えず本文中で示す各石器点数は完形三七三点に基づくものである。(戸田)

三 打製礫斧

① 1類A種片刃(第2～6図1～70)

1類A種片刃としたものは、素材となる自然礫の形状を大きく残し、基本的に片端の先端部のみ打製による片刃を作り出すものである。総点数は一七五点を数え、本遺跡礫斧の主体となるものであり約47%を占めるものとなつている。大きさ(長径)に大小があり、その内訳は大形五四点、中形六八点、小形五三点となる。大形・中形・小形の出土数からは、

表 1 (1・2 類打製)

1 類 A 種片刃 実測 / 未実測 大形 { 13cm超 1/ 1 11~12cm台 10/ 6 10cm台 17/ 19 大形 計 28/ 26 中形 { 9cm台 13/ 22 8cm台 10/ 23 中形 計 23/ 45 小形 { 7cm台 13/ 18 7cm未満 6/ 16 小形 計 19/ 34		/	1 類 A 種両刃 実測 / 未実測 10cm台 2/ 3 大形 計 2/ 3 8~9cm台 2/ 8 中形 計 2/ 8 5~7cm台 6/ 4 小形 計 6/ 4		小計 計 実測 / 未実測 30/29 59 25/53 78 25/38 63 200			
2 類 A 種片刃 実測 / 未実測 大形 { 13cm超 5/ 0 10~12cm台 7/ 9 大形 計 12/ 9 中形 { 9cm台 6/ 7 8cm台 7/ 7 中形 計 13/ 14 小形 5~7cm台 5/ 3 小形 計 5/ 3			2 類 A 種 L 字状片刃 実測 / 未実測 10~12cm台 7/ 8 大形 計 7/ 8 8~9cm台 5/ 5 中形 計 5/ 5 5~7cm台 3/ 0 小形 計 3/ 0		2 類 A 種両刃 実測 / 未実測 10cm台 2/ 1 大形 計 2/ 1 8~9cm台 4/ 1 中形 計 4/ 1 7cm台 1/ 1 小形 計 1/ 1		小計 計 実測 / 未実測 21/18 39 22/20 42 9/ 4 13 94	

表 2 (1・2 類局部磨製)

1 類 B 種片刃 実測 / 未実測 大形 10~11cm台 6/ 2 大形 計 6/ 2 中形 8~9cm台 6/ 5 中形 計 6/ 5 小形 5~7cm台 6/ 4 小形 計 6/ 4		/	1 類 B 種両刃 実測 / 未実測 大形 計 0/ 0 8~9cm台 2/ 2 中形 計 2/ 2 5~6cm台 4/ 4 小形 計 4/ 4		小計 計 実測 / 未実測 6/ 2 8 8/ 7 15 10/ 8 18 41			
2 類 B 種片刃 実測 / 未実測 大形 { 13cm超 1/ 0 10cm台 2/ 1 大形 計 3/ 1 中形 8~9cm台 5/ 2 中形 計 5/ 2 小形 5~7cm台 5/ 3 小形 計 5/ 3			2 類 B 種 L 字状片刃 実測 / 未実測 10cm台 1/ 0 大形 計 1/ 0 8~9cm台 1/ 2 中形 計 1/ 2 小形 計 0/ 0		2 類 B 種両刃 実測 / 未実測 10~11cm台 3/ 1 大形 計 3/L字1 8~9cm台 5/ 2 中形 計 5/ 2 5~7cm台 3/ 1 小形 計 3/ 1		小計 計 実測 / 未実測 7/ 2 9 11/ 6 17 8/ 4 12 38	

総計 (完形品) 373点 (実測 182 / 未実測 191)

中形がやや多いといえるが、大形・小形の出土数も拮抗する数量を示していることが確認できたことは礫斧の特徴として注目すべき点となる。これらのうち七〇点を図化した。図化資料の内訳は大形(1~29)、中形(30~51)、小形(52~70)である。

1-A大形(1~28)

1~28は長径が一〇cm以上の大形と分類されるものである。点数は五四点を数え、そのうち二八点を図化した。その内訳は一三cmを越すもの一点(1)、一一~一二cm台のもの一〇点(2~11)、一〇cm台のもの一七点(12~28)となる。大形二八点の平均重量は二六一gを量る。

1は長径一三cmを測り1類A種では最も大きく、重量は四六六・五gを量る。平面形態は長円状を呈し、刃部は平・曲刃となる。なおこのようない三cmを超えるものが礫斧全体で数点認められ、大形の中でも超大形としておきたい。

2~11は長径が一~一二cm台のものである。長さ一二cm台の2・3は厚みがあり重量のある長円形の自然礫を用いている。2の刃部は平・曲刃を呈し、上端に見る剥離は、逆端部を再利用(二次利用)した片刃の刃部となっている。3は自然礫の細端部を用いて尖・細刃を作出する。4~11は長さ一一cm台を測り、4~8は棒状礫の先端を刃部とし、9・10は長円形、11は楕円形を呈する。刃部形態は4~6が尖・細刃、7~11は平・曲刃となる。長径一一~一二cm台一〇点の平均重量は三二〇・九gを量る。

12~28は長径が一〇cm台のものである。12~16の平面形態は細身で、特に12~14は棒状礫の先端部が細い端を刃部とし、いずれも刃部は尖・細刃となる。15~25は長円形、26~28は刃部が開く撥状を呈する。いずれも刃部は平・曲刃となる。なお25の上端は再利用(二次利用)の刃部が

作出され、両刃の平・曲刃となる。

1-A中形(29~51)

29~51は長径が八~九cm台を測り、中形に分類されるものである。点数は六八点を数え、礫斧中最も多い形態となる。そのうち二三点を図化した。内訳は九cm台のもの一三点(30~41)、八cm台のもの一〇点(42~51)となる。中形二三点の平均重量は一四三・七gを量る。

29~41は長径が九cm台のものである。30・37は12~14と同様の棒状礫を用い細身で、刃部は尖・細刃となる。29は四角形を呈し、刃部は平・曲刃である。31~41の平面形態は礫斧の基本形態である長円状を呈し、刃部加工も極めて類似している。これらの刃部は31~33が尖・細刃、34~36・38~41が平・曲刃となる。36の上端には下端刃部と良く似た再利用の片刃の刃部が作出されている。これら九cm台一三点の平均重量は一八〇・二gを量る。

42~51は長径が八cm台のものである。42・43は30・37と似る棒状礫を用い平面形態は細身、刃部は尖・細刃となる。44~50の平面形態は長円状、51は楕円状を呈す。刃部は44~47が尖・細刃、48~51が平・曲刃となる。47の上端には下端と同様の再利用による尖・細刃が作出されている。八cm台一〇点の平均重量は一〇八・二gを量る。

1-A小形(52~70)

52~70は長径が七cm台以下の小形に分類されるものである。点数は五三点を数え、これらのうち一九点を図化した。内訳は長さ七cm台のもの一三点(52~64)、七cm未満のもの六点(65~70)となる。小形一九点の平均重量は六三・四gを量る。

52~64は長径が七cm台のものである。52・54・56~59は大形・中形にも見られた棒状礫の小形のものを用い、特に52~57は素材礫の先端部が

細いもの選ばれている。53・55の平面形態は長円形で52～59の刃部はいずれも尖・細刃となる。60・61は刃部が開く撥状、62～64は楕円形を呈し互いに相似する平面形態で、いずれも平・曲刃となる。7cm台二三点の平均重量は七二・四gを量る。

65～70は長径が7cm未満のものである。素材礫の選択により二種の差があり、5cm台の65・66は小さな棒状礫を用いており細身、刃部は尖・細刃となり、一方67～69は長円状を呈する平面形態で、刃部は67が尖・細刃、他は平・曲刃となる。

65・66は1類A種の中で最も小形のもので、刃部先端には小さな剥離が数回施されている。70の平面形態は楕円状を呈し、刃部は平・曲刃である。7cm未満六点の平均重量は四三・七gを量る。

② 1類A種両刃 (第6・7図71～80)

1類A種両刃としたものは、自然礫の形状を残し、先端刃部は打製による両刃となるものである。総点数は二五点を数え、一七五点の1類A種片刃と比べ出土量は極めて少ない。その内訳は大形五点、中形一〇点、小形一〇点となる。これらのうち一〇点を図化した。

本遺跡の両刃には前述のように蛤刃状先端と片刃状先端の2種が見られ、72～74・80は前者、71・77・79は後者に分けられる。

1-A両刃大形 (71・72)

71・72は長径が一〇cm台を測り、大形と分類されるものである。いずれも棒状礫を用い、刃部は平・曲刃となる。71の刃部はやや斜めに作られ、刃角は鈍角に近い。一〇cm台二点の平均重量は二二・六gを量る。

1-A両刃中形 (73・74)

73・74は長径が9cm台を測り、中形と分類されるものである。73の平

面形態は長円状を呈し、74は棒状を呈する。いずれも刃部は平・曲刃となる。9cm台二点の平均重量は一五八・八gを量る。

1-A両刃小形 (75～80)

75～80は長径が7cm台以下を測り、小形と分類されるものである。六点を図化した。内訳は長さ7cm台のもの四点(75～78)、5cm台のもの二点(79・80)となる。小形六点の平均重量は七一・五gを量る。

75・76の先端刃部は素材礫の細い端部を用いたものである。刃部はいずれも尖・細刃となる。77・78の平面形態は長円状を呈し、刃部はいずれも平・曲刃となる。77の刃部裏面剥離は微細であり、使用による剥離とすると、1類A種片刃に分類される可能性がある。78は上下端に両面加工が施され、上端は再利用の両刃となり平・曲刃が作出されている。これら7cm台四点の平均重量は八二・七gを量る。

79・80は長径が5cm台のものである。いずれも平面形態は小さな長円状を呈し、刃部は幅狭ながら平・曲刃となる。これら5cm台二点の平均重量は四九・一gを量る。

③ 2類A種片刃 (第7～9図81～110)

2類A種片刃としたものは、先端刃部の加工に加えて、周縁および裏面にも加工が及び、刃部を打製の片刃とするものである。総点数は五六点を数え、その内訳は大形二点、中形二七点、小形八点となる。これらのうち三〇点を図化した。図化資料の内訳は大形(81～92)、中形(93～105)、小形(106～110)である。

2類A種片刃では、大く小形いずれも長円形、楕円形を呈する礫素材を多く用いており、全体的に相似するものが多い一方、1類A種片刃に多く見られた棒状礫素材が少ないことが指摘される。

周縁加工が何故加えられるのかは今後の研究課題となるが、幅広・扁平礫の方が棒状礫よりも加工し易いという相関関係を考えることができよう。

2-1-A大形 (81~92)

81~92は長径が10cm以上を測る大形品である。二点を数え、そのうち二点を図化した。内訳は12cm台のものはなく13cmを超過するもの5点(81~85)、10~11cm台のもの7点(86~92)となる。81~85が突出して大きく超大形と呼べ、礫斧としては最大サイズといえる。

81は本遺跡最長の15.2cmを測り、83は14.9cm、重量は七二五gで本遺跡最重量となる。84も14.7cm、六三九gの重量品となる。いずれも平面形態は長円形を呈する。刃部は81が尖・細刃、83・84は平・曲刃となる。

82は長径13.3cm、重量五五七g、85は長さ13cm、重さ三六二gで、82・85はともに平面形態は下半が広い撥状を呈す。刃部は平・曲刃となり、特に82は剥離が表面の先端周辺にのみ施されているため、1類A種に近似する。13cmを超える大形五点の平均重量は五六三.七gを量る。

86~92は長径が10~11cm台のものである。86の平面形態は細身で、刃部は尖・細刃となる。周縁加工は粗く少ないが、下半部は両側縁方向から深い剥離が施されている。87は楕円状、88~92は長円状を呈する平面形態で、刃部は90が尖・細刃となり、他は平・曲刃となる。

90の周縁加工は部分的だが、87・89の剥離は内側に深く及び、86・88は裏面にも剥離がみられる。92の周縁加工は全縁辺の両面に密な状態で施されるが、側縁の敲打痕が著しい。10~11cm台七点の平均重量は二二一.六gを量る。

2-1-A中形 (93~105)

93~105は長径が8~9cm台の中形品である。二七点を数え、そのうち一三点を図化した。内訳は9cm台のもの6点(93~98)、8cm台のもの7点(99~105)となる。中形一三点の平均重量は一四〇gを量る。

93~98は長径が9cm台のものであり、特に93~97の平面形態は長円状・楕円状を呈し、長径10cm台の88・92などと共通する一定した周縁加工礫斧の形態と、剥離が認められる。

刃部は93・94が尖・細刃、95~97が平・曲刃となる。93~96の周縁加工は表面ほぼ全面に剥離が及び、93・95では裏面縁辺にも剥離が施されている。98は下半が広い撥状を呈し、刃部はいずれも平・曲刃となる。97は周縁加工が先端周辺に限られ、裏面は自然面のため、1類A種と区別が難しい。9cm台六点の平均重量は一五一.四gを量る。

99~105は長径が8cm台のものである。99・100は四角形、101~105は一定した長円状の礫を用い、刃部はいずれも平・曲刃となる。周縁加工は99・100・103がほぼ表面全体に施されるほかは中~下半部に施されている。102の上端には再利用の片刃の刃部が作出されている。8cm台七点の平均重量は一三〇.二gを量る。

2-1-A小形 (106~110)

106~110は長径が5~7cm台の小形品である。八点を数え、そのうち五点を図化した。内訳は長さ7cm台のもの3点(107~109)、6cm台のもの1点(110)、5cm台のもの1点(106)となる。小形五点の平均重量は六七.六gを量る。

106~108は長円状の形態をもち、先の93~97と相似する。109・110は四角形を呈し、刃部は107・108が尖・細刃、106・109・110が平・曲刃となる。

周縁加工は107・109・110が表面にやや密に施され、110は裏面にも剥離が

認められる。なお106は薄い剥片を素材とし2類A種最小の製品である。刃部は微細な剥離により作られており、礫斧とするには多少問題が残る。

④ 2類A種L字状加工の片刃 (第10・11図111～125)

2類A種L字状加工の片刃としたものは、2類A種の中でも先端の刃部剥離から続く形で片側縁に偏って側縁加工が施されたもので、刃部からのL字状を呈する剥離手法が特徴的である。総点数は二八点を数え、その内訳は大形一五点、中形一〇点、小形三点であり、大形が多いことが特徴的である。これらのうち一五点を図化した。図化資料の内訳は大形(111～117)、中形(118～122)、小形(123～125)である。

2-1 A L字大形 (111～117)

111～117は長径が一〇cm以上の大形品である。一五点を数え、そのうち七点を図化した。内訳は一・二cm台のもの二点(111・112)、一・一cm台のもの一点(113)、一・〇cm台のもの四点(114～117)となる。大形七点の平均重量は二・三九・五gを量る。

111・112・116は大形の棒状礫を用いており平面形態は細身で、111・116は右側縁、112は左側縁にL字状加工が伸びる。刃部はいずれも尖・細刃となる。111の上端には再利用の刃部が作出されている。

113・115・117の平面形態は長円状、114は長方形を呈し、113は右側縁、114は右側縁の表裏面に剥離が加えられ、115・117は左側縁にL字状加工が伸びる。刃部はいずれも平・曲刃となる。

2-1 A L字中形 (118～122)

118～122は長径が八～九cm台の中形品である。一〇点を数え、そのうち五点を図化した。内訳は九cm台のもの四点(118～121)、八cm台のもの一点(122)となる。中形五点の平均重量は一・七六・七gを量る。

平面形態は118が細身、119～121が長円状、122が楕円状を呈し、L字状加工は片側縁に延びる。

刃部は118・119が尖・細刃、120～122が平・曲刃となる。119・121の側縁加工は114と同様に同一側縁の表裏面に施されることを特徴とする。

2-1 A L字小形 (123～125)

123～125は長径が五～七cm台の小形品である。三点を数え、そのうち三点を図化した。内訳は長さ七cm台のもの一点(123)、六cm台のもの一点(124)、五cm台のもの一点(125)となる。123～125はいずれも均一な薄小形の扁平礫を素材とする。平面形態は同サイズの長円状を呈し、L字状加工も極めて類似する。刃部はいずれも幅の細い礫を用いていることから細刃として分類される。小形三点の平均重量は五・一三・三gを量る。

⑤ 2類A種両刃 (第11図126～132)

2類A種両刃としたものは、周縁および裏面に加工が施され、刃部は打製の両刃となるものである。総点数は一〇点を数え、その内訳は大形三点、中形五点、小形二点となる。これらのうち七点を図化した。図化資料の内訳は大形二点(126・127)、中形四点(128～131)、小形一点(132)である。

2-1 A 両刃大形 (126・127)

126・127は長径が一〇cm台のものである。大形二点の平均重量は二・一三・六gを量る。

平面形態は126が楕円状、127は長円状を呈し、刃部はいずれも平・曲刃となる。126は表面全周に剥離が加えられ、刃部裏面の剥離は小さく、片刃状となり、上端には再利用と考えられる片刃が作出されている。127の刃部裏面は大きい剥離が加えられ、蛤刃状の両刃となる。

2 I A 両刃中形 (128 ~ 131)

128 ~ 131は長径が八 ~ 九 cm 台の中形品である。五点を数え、四点を凶化した。内訳は九 cm 台のもの二点 (128・129)、八 cm 台のもの二点 (130・131) となる。中形四点の平均重量は一四九・七 g を量る。

平面形態は 128・129 が長円状、130・131 は刃部が開く撥状を呈し、刃部はいずれも平・曲刃となる。周縁加工は両面に施され、128 は両面の全周に加工が施され、刃部は蛤刃状、130・131 も刃部付近の両面に剥離が施され蛤刃状となる。129 の両刃は鈍角であり、欠損品かもしれない。なお 128・131 の上端には再利用による両刃と片刃の刃部が作られる。

2 I A 両刃小形 (132)

小形品は一点を数える。132 は長径七 cm 台の小形品である。平面形態は刃部がやや開く四角形を呈し、刃部両面に剥離を加え両刃を形成し、刃部は平・曲刃となる。(戸田)

四 局部磨製礫斧

① 1 類 B 種片刃 (第 11・12 図 133 ~ 150)

1 類 B 種片刃としたものは、自然礫の形状を大きく残し、剥離を加えた先端刃部を研磨して片刃の局部磨製を作出するものである。総点数は二九点を数え、その内訳は大形八点、中形二点、小形一〇点となる。これらのうち一八点を凶化した。凶化資料の内訳は大形 (133 ~ 138)、中形 (139 ~ 144)、小形 (145 ~ 150) である。

1 I B 大形 (133 ~ 138)

133 ~ 138 は長径が一〇 cm 以上の大形品である。八点を数え、六点を凶化した。内訳は一 cm 台のもの二点 (135・136)、一〇 cm 台のもの四点 (133・137・138) となる。大形六点の平均重量は二五五・三 g を量る。

平面形態は大きく二種あり、大形の棒状礫を用いる細身の 133・135・137 と、134・136・138 に見る長円形の素材礫を用いるものがある。刃部は 133 ~ 135 が尖・細刃で他は平・曲刃となる。135 の上端は 1 類 A 種の両刃として再利用されている。

刃部の研磨は、剥離を加えた片刃部分に施され、研磨面の広い 133・135・136 と先端部に弱い研磨の加えられる 134・137・138 がある。

1 I B 中形 (139 ~ 144)

139 ~ 144 は長径が八 ~ 九 cm 台の中形品である。一一点を数え、六点を凶化した。内訳は九 cm 台のもの三点 (139 ~ 141)、八 cm 台のもの三点 (142 ~ 144) となる。中形六点の平均重量は一二〇・五 g を量る。

平面形態は大きく二種あり、139・141・143 が棒状礫を用いる細身のものと、140 の四角形、142・144 の長円状を呈するものがある。刃部は 139・141・143 が尖・細刃、140・142・144 は平・曲刃となる。139・141・143・144 は研磨面をもつが、140・142 は剥離面の稜線にのみ研磨が認められる。

1 I B 小形 (145 ~ 150)

145 ~ 150 は長径が五 ~ 七 cm 台のものである。一〇点を数え、六点を凶化した。内訳は長さ七 cm 台のもの二点 (145・146)、六 cm 台のもの三点 (147 ~ 149)、五 cm 台のもの一点 (150) となる。小形八点の平均重量は五七・一 g を量る。

平面形態は 145・147 が細身、146・149 が楕円状、148 が撥状を呈する。150 の基部は欠損後再利用の可能性があり、長さ等は不明なところがあるが小形品であることは確かである。刃部は 145・147 が尖・細刃、146・148 ~ 150 は小形ではあるが平刃に分類される。146・149・150 は刃部先端全面に平滑な研磨面が作出され、面取り状になっている。他の三点は剥離面の稜線を中心に研磨されたものとなっている。

② 1類 B種両刃 (第12・13 図151～156)

1類 B種両刃としたものは、自然礫の形状を残し、先端刃部を磨製の両刃とするものである。総点数は一二点を数えるが、大形品となるものは見られず、その内訳は中形四点、小形八点となる。これらのうち六点を図化した。図化資料の内訳は中形(151・152)、小形(153～156)である。両刃とはいえ刃部研磨は152・153・156のように刃部剥離を加えた面の研磨を主体とするものと、151・154・155のように剥離痕が不明で自然礫面に直接研磨を加えたと見られるものがある。なお151を除き側面観は片刃状をなす。

1-B 両刃中形 (151・152)

151・152は長径が八～九cm台の中形品である。四点を数え、二点を図化した。内訳は九cm台のもの一点(151)、八cm台のもの一点(152)となる。中形二点の平均重量は一四九・五gを量る。

平面形態は151が長円状、152が撥状を呈する。刃部は151が自然礫の細い端を用いた尖・細刃でノミ状に近く、152は自然礫の幅広端を用いる平・曲刃となる。表面刃部はいずれも広く研磨面が作出されている。151の上端には刃部形成としては鈍角となる両面剥離が認められ、一方、152の上端には再利用の打製片刃が作られる。

1-B 両刃小形 (153～156)

153～156は長径が六cm台のものである。八点を数え、四点を図化した。これらの平均重量は七三・二gを量る。

平面形態は153が細身、154は楕円状、155・156は四角形を呈する。刃部は153が尖・細刃、154～156は平・曲刃となる。いずれも表面刃部には面取り状の平坦な研磨面が作られている。なお155の右側縁には面取り状の研磨

面がある。

③ 2類 B種片刃 (第13・14 図157～169)

2類 B種片刃としたものは、周縁および裏面に加工が施され、刃部は磨製の片刃となるものである。総点数は一九点を数え、その内訳は大形四点、中形七点、小形八点となる。これらのうち一三点を図化した。図化資料の内訳は大形三点(157～159)、中形五点(160～164)、小形五点(165～169)である。

2類 B種の磨製片刃を観察すると、1類 B種片刃での観察と同様に刃部を形成する先端剥離が加えられた上から研磨が行われている例が多く認められ、稜線を研磨するものから広く磨面化するものまでのバラエティがある。

このことは局部磨製を目的とした一連の製作としての剥離→磨製化への流れとして捉えられるのか、一次的に打製の礫斧(1-A、2-A)として作り使われた後に二次的に研磨が行われたのかは検討すべき点となる。

2-B 大形 (157～159)

157～159は長径が一〇cm以上の大形品である。四点を数え、三点を図化した。内訳は一三cm台の特大サイズ一点(157)、九cm台のもの二点(158・159)となる。一〇cm以上の三点の平均重量は二三〇・一gを量る。

157は大形縦長の半割剥片を素材として主要剥離面先端の幅狭の部分をよく研磨した例の少ない刃部製作を行い、右側縁に粗い周縁加工が見られる。158は細身、159は長円状を呈し、刃部は3点いずれもが尖・細刃となる。158・159の刃部先端は尖鋭に研磨されノミ状を呈する。

2 I B 中形 (160 ~ 164)

160 ~ 164 は長径が八 ~ 九 cm 台の中形品である。七点を数え、五点を図化した。内訳は九 cm 台のもの三点 (160 ~ 162)、八 cm 台のもの二点 (163・164) となる。中形五点の平均重量は一三五・三 g を量る。

平面形態は 160・161 は長円状自然礫の細端部を用い、158・159 と良く似た尖鋭な磨製刃部を作出する。162 は長円状、163 は剥片素材の楕円状、164 は四角形を呈する。刃部は 162 ~ 164 が平・曲刃となる。刃部の研磨は剥離面の稜線を中心とした部分に多く、160 の上端には再利用による局部磨製の片刃が作られ珍しい両端磨製となる。160 ~ 162 の周縁加工は少なく、特に 162 は 1 類 B 種片刃との区分が難しい。一方、163・164 の周縁加工は密に施され、164 では裏面にも剥離が施される。

2 I B 小形 (165 ~ 169)

165 ~ 169 は長径が五 ~ 七 cm 台のものである。八点を数え、五点を図化した。内訳は長さ七 cm 台のもの二点 (165・166)、六 cm 台のもの二点 (167・168)、五 cm 台のもの一点 (169) となる。小形五点の平均重量は五四・九 g を量る。

平面形態は 165・166 が細長い扁平礫を用いる細身、167 ~ 169 が楕円状の二形態に分けられる。刃部は 165・166 が尖・細刃、167 ~ 169 が平・曲刃となる。165 ~ 168 の研磨面は広く、先端刃部剥離を加えた後に磨いて刃部を作出しており、169 は剥離面の稜線を中心とした部分的な研磨となっている。なお 166 の周縁加工は部分的に僅かであり、162 と同様に 1 類 B 種片刃との区分が難しい。169 は半割礫を素材に作出されており、表面の剥離は深く内側に及ぶ。なお、165 の上端部には再利用の打製片刃が作られる。

④ 2 類 B 種 L 字状加工の片刃 (第 14 図 170・171)

2 類 B 種 L 字状加工の磨製片刃は、L 字状礫斧を作った後に、先端部および胴部の剥離面に研磨を加え局部磨製としたものである。総点数四点を数え、その内訳は大形一点、中形三点となる。これらのうち大形一点 (170)、中形一点 (171) を図化した。

2 I B L 字大形 (170)

170 は長径一〇・一 cm、重量一九七・二 g を量る。平面形態は長円状を呈し、右側縁に L 字状加工し、刃部は尖鋭な磨製となり、ノミ状の尖・細刃となる。先端の一部にやや広い研磨面が見られ、また胴部の剥離稜線上にも研磨が施される。

2 I B L 字中形 (171)

171 は長径九・四 cm、重量二四二・一 g を量る。平面形態は長円状を呈し、右側縁に L 字状加工し、刃部は曲・平刃である。研磨は先端剥離面の稜線に認められる。

⑤ 2 類 B 種両刃 (第 14・15 図 172 ~ 182)

2 類 B 種両刃としたものは、周縁および裏面にも剥離が施され、先端部を磨製の両刃とするものであり、礫斧としては最も手の込んだ作りとなる。総点数は一五点を数え、その内訳は大形四点、中形七点、小形四点となる。これらのうち二点を図化した。図化資料の内訳は大形三点 (172 ~ 174)、中形五点 (175 ~ 179)、小形三点 (180 ~ 182) である。1 類 B 種の両刃と同様に、片刃状の側面観をなすものが多い。

2 I B 両刃大形 (172 ~ 174)

172 ~ 174 は長径が一 ~ 一〇 cm 台の大形品である。四点を数え、三点を図化した。内訳は一 cm 台のもの二点 (172・173)、一〇 cm 台のもの一点

(174)となる。大形三点の平均重量は三五・五gを量る。

172は板状の自然礫を用い重量のあるもので、平面形は長方形を呈する。板状素材を用いるものは少なく、また幅六cmを超える先端部平刃の作りと裏面(自然面)への研磨が広く及び、敲打と剝離による周縁加工が両側縁に施されていることなど、礫斧としては特殊な形態となる。

173・174の平面形態は長円状を呈し、やや大形ではあるが局部磨製礫斧の典型的な形態をもつているといえる。刃部はいずれも平・曲刃となり、表面刃部に広い研磨面が作出され片刃状の作りとなる。なお174の右側縁下端には面取り状の研磨面が見られる。

2-B 両刃中形 (175～179)

175～179は長径が八～九cm台の中形品である。七点を数え、五点を図化した。内訳は九cm台のもの三点(176～178)、八cm台のもの二点(175・179)となる。中形五点の平均重量は二三・七gを量る。

平面形態はバラエティがあり175が細身、176が撥状、177・178は縦長の礫を用いる長円形、179が楕円状を呈する。刃部は175が尖・細刃、176～179が平・曲刃となる。175は半割礫を素材としたもので、表面は全面に剝離された後に中半から先端部に研磨が加えられ、裏面は先端部に僅かな研磨が施され、片刃状に近い。

176～179は裏面に礫面を残し、緩やかなカーブにあわせて先端部から胴中部に及び研磨が施され、表面は周縁加工あるいは先端部加工を加えた後に広い研磨面をもつ磨製刃部が作られる。176・177・179は片刃状を呈し、178は蛤刃状となる。

2-B 両刃小形 (180～182)

180～182は長径が五～七cm台のものである。四点を数え、三点を図化した。内訳は七cm台のもの一点(181)、六cm台のもの一点(180)、五cm台の

もの一点(182)となる。小形三点の平均重量は五九・三gを量る。

平面形態は180は細身、181が長円状、182は基部欠損後の再利用と考えられ、四角形状を呈する。刃部は180が尖・細刃、181・182が平・曲刃となる。

180は薄い剝片を素材とした本遺跡の礫斧中最も軽い製品である。表面は自然面で先端に磨製刃部を作り、裏面の主要剝離面は先端部に僅かな研磨を加え両刃としている。このような小剝片を用いた例は本例と、破片1例のみとなり、礫斧とするか多少の問題が残る。181・182は片刃状の両刃となるが、182は基部欠損後の再加工と見られる。なお裏面の自然面には広く浅い研磨が施されている。(戸田)

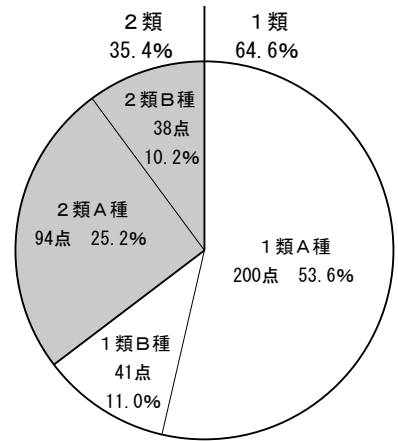
五 まとめと考察

今回の礫斧に関する整理研究では、完形あるいは準完形品三七三点を観察し分類を行った。然糸文土器期に伴う礫斧としては最も多い出土点数となるもので、分類の結果からは礫斧に関する基本的な石器形態の全体像を捉えることができたと考えられる。

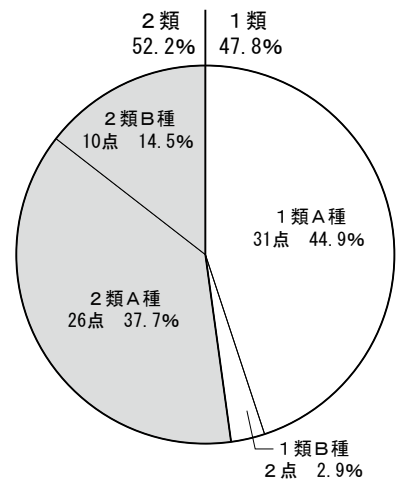
ここでは先行研究となる江ノ島植物園内出土資料との比較を含めてまとめと考察を行いたい。なお基本分類と点数は冒頭に示した表1、2をもととして、グラフ1～3、表3、4を作成した。

(1) グラフ1では形態分類数量比を示した。礫斧総数三七三点中自然面を大きく残す1類A種は、二〇〇点(五三・六%)であり礫斧の過半数を占め、中でも片刃は一七三点と圧倒的な主体を占める。次に多い周縁加工を施す2類A種の九四点(二五・二%)と比べ1類A種は2倍の出土数量となる。

グラフ2の江ノ島植物園内例では1類A種が全体の四五%、2類A種が全体の約三八%となり、十王堂免と比べ2類A種の比率が高いが、両



グラフ1 十王堂免礮斧形態分類 (完形・準完形 373点)



グラフ2 参考：江ノ島植物園内 礮斧形態分類 (完形 69点)

遺跡ともに1類A種が礮斧の五〇%前後を占める主体的形態であることが数値的に明確になったといえる。

次に磨製も含めた大分類の1類と2類で見ると、1類二四一点(六五%)、2類一三二点(三五%)となる。江ノ島植物園内例では2類が五二・二%と半数を超える数値となるが、出土総点数との関係もあり、十王堂免のあり方がより実態に近いものと考えられる。

(2) 打製(A種)と刃部磨製(B種)の比率を見ると、A種合計二九四点に対してB種合計七九点であり、七九%対二二%となる。江ノ島植物園内例では八二・五%対一七・五%であり、参考例として大丸遺跡では磨製が約一八%と推計される。十王堂免の磨製比率二二%はこれら神奈川県内の2遺跡と比べて多少率が高いが、一七・五〜二二%の範囲内で磨製が存在することがより明らかとなった。

なお1類での磨製の比率と2類での磨製の比率を見ると、1類A種二〇〇点に対して1類B種は四一点で、一七%となるが、2類ではA種九四点に対して2類B種三八点は二九%となり周縁加工を施す2類B種の磨製比率がかなり高いことがわかる。江ノ島植物園内では1類の磨製

から先端の一部を磨面化するもの、さらに刃部を全磨製化するものまでの変差が見られる。

このような変差は打製の片刃・両刃使用時から段階を経て磨製化への手が加えられていったあり方と捉えられ、局部磨製化は目的的なものではなく、刃部再生化の一つの手段として考案された結果と考えられるのである。したがって磨製化により礮斧の用途が変わる、とするものではなく、打製礮斧利用の延長上にあるものと考えられよう。

(3) 礮斧の大きさ(長さ)区分については江ノ島植物園内資料において初めて大形品、中形品、小形品の分類を試みたが、出土全点の計測は行わず、また重量の計量分析も行わなかった。

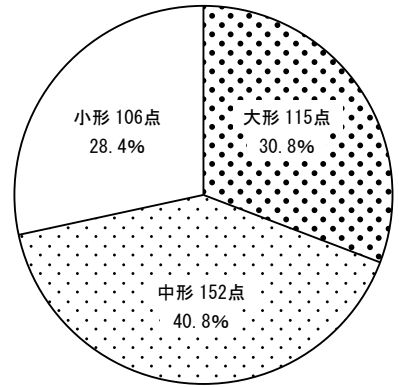
今回の分類では採集品の完形資料三七三点という裏付けに基づいて大きさと重量の数値を得ることができた。今後の礮斧研究における基準的数値と言えるものである。(グラフ3・表3参照)

なお表3の長さ一三cmを超える超大形としたものは重量も極めて重く、分類基準の定型的大形と比べ極端な差をもっている。点数も七点と少ないことから礮斧の範疇とするかは今後の課題としておきたい。

は二点の六%と少なく、2類の磨製は一〇点の二六%となり十王堂免と近い数値となる。

このような今回の数値を踏まえ江ノ島植物園内資料において指摘した「2類礮斧とした半両面あるいは周縁加工の多い礮斧から局部磨製が多く作られている」あり方を追認することができた。

なおこのような傾向は自然磨面への研磨よりも剥離面への研磨の方が磨製化し易かった可能性が考えられ、剥離面の研磨を観察すると、稜線を研磨するもの



グラフ3 十王堂免礫斧大きさ別 (完形・準完形 373点)

3サイズはほぼ均等に作られていることがわかる。

ただし3サイズの内訳を表1の分類別に見ると、分類毎に大く小の割合には差が認められるところがある。

1類A種では大形五九対中形七八対小形六三と数量的に拮抗するが、2類A種では大形三九対中形四二対小形一三と小形が極めて少ないことが注意される。周縁加工を施す2類では小形品は不向きであったこと、あるいは装着上の理由などを考えることができる。

一方、表2の1類B種では大形八対中形一五対小形一八と中・小形品が多く、2類B種でも大形九対中形一七対小形一二と同様の傾向を示しており、局部磨製の大半は中・小形が占めていることがわかる。

以上、グラフ3の結果を見て小形品の比率が少ないことにやや驚き、一方大形品の多いことに大きな驚きを覚えた。筆者自身これまでの調査資料を扱う中で礫斧は小形であり、また局部磨製が代表的であるという経験的先入観が働き、せっかくなの大丸遺跡の多くの実測図も数値化することを忘れて来たことを反省しなければならない。そして、先端剥離が少なく自然礫との判別が難しい礫斧については、礫斧に対する経験的な

さてグラフ3では、大形(小形の数量比を示した。中形が四〇・八%と最も点数が多く、大形三〇・八%がそれに次ぎ、小形は二八・四%とやや少ないという数値が得られた。中形がやや多いが3つのサイズそれぞれ一〇〇点以上の出土となり、大局的に見て

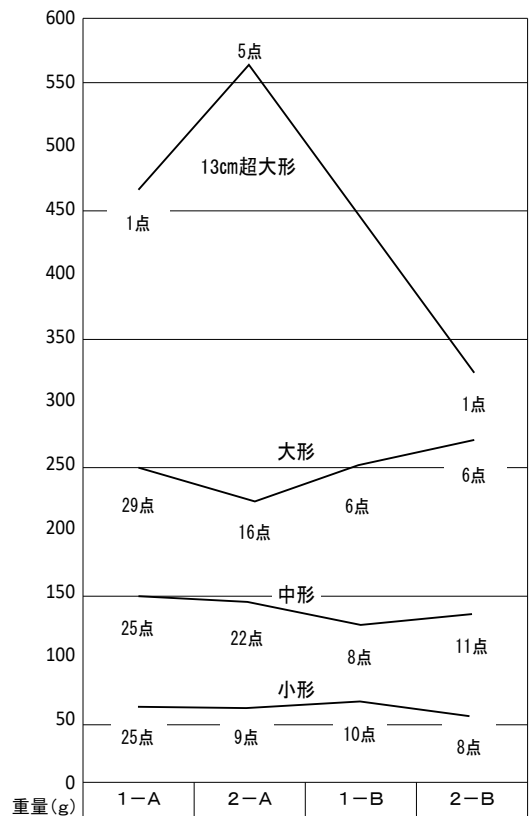


表3 十王堂免礫斧の分類別平均重量表(図化資料182点)

知識を持った調査者により発掘時、整理時における徹底的な検出努力が必要であることを改めて痛感するのである。

(4) 礫斧の重量は表3に示した。図化した一八二点の各分類における大形(小形の平均重量を求めたものである。

今回の整理で特に超大型と分類したものは全資料中七点のみであり、三二四gが一点あるが他の六点は四六六g一点と、1類A種に五点(平均重量五六三g)であり、基準とする大形品(一〇〇〜一二cm)平均重量の約2倍の重さとなる。表3の平均重量分布図を見ると大きく乖離していることがわかる。前述したように礫斧の範疇に加えるか今後の課題となる。

大形は各形態分類別に見て二二三・八g〜二七一・七g(二五〇g前後)の安定した平均重量分布を示している。

中形も各形態分類別に見て一二七g〜一四九g(一二三〇g前後)の範囲内に安定した平均重量分布を示しており、小形についてはさらに一定

した五六g(六九g(六〇g前後)の平均重量を示している。
 このように礫斧の大きさと平均重量との間には一定の傾向をもっていることがわかり、大・中・小の3つの大きさ区分が有効であることの証左とも言えるのである。

(5) 礫斧の刃部形態については、冒頭で述べたように「平・曲刃」と「尖・細刃」の大きく二者に分類する考えを提示した。両者の中間形態もあり、分類に迷う例もあるが観察できた三七〇点は表4に示すように、平・曲刃が二二九点(六二%)、尖・細刃が一四一点(三八%)と分類された。

最も多い形態の1類A種片刃・両刃二〇〇点で見ると平・曲刃は一一四点(五七%)、尖・細刃は八六点(四三%)となり二者の比率は多少近くなるが、平・曲刃が過半数を占める傾向に変わりはない。

次に多い2類A種片刃・L字・両刃では、平・曲刃六八点(七二%)、尖・細刃二六点(二八%)となり、平・曲刃の率がより高くな

長さ	打製礫斧 (294点)					
	1類A種片刃・両刃 (200点)			2類A種片刃・L字・両刃 (94点)		
	平・曲刃	尖・細刃	計	平・曲刃	尖・細刃	計
大形 (98点)	42	17	59	29	10	39
中形 (120点)	43	35	78	29	13	42
小形 (76点)	29	34	63	10	3	13
合計	114	86	200	68	26	94

長さ	局部磨製礫斧 (76点)					
	1類B種片刃 (39点)			2類B種片刃 (37点)		
	平・曲刃	尖・細刃	計	平・曲刃	尖・細刃	計
大形 (16点)	3	5	8	5	3	8
中形 (32点)	9	6	15	12	5	17
小形 (28点)	12	4	16	6	6	12
合計	24	15	39	23	14	37

表4 分類別刃部形態と長さの関係 (未掲載資料を含む完形・準完形 373点中、刃部不明瞭の3点を除いた 370点)

傾向を示している。この2類A種における尖・細刃の減少については、文中でも述べたように棒状礫素材が少ないことがあげられ、周縁加工が施しにくい素材形態の選択を避けた可能性が考えられる。

(6) 刃部幅については、実測図化した一八二点について計測を行い、大形・小形の長さ分類と刃部幅の関係を表5に示した。

大形の場合、刃部幅四cm台にピークがあるが、二cm台から五cm台までほぼ均等な点数をもって、分散している傾向が認められる。

中形は刃部幅三cm台にピークがあるが、二cm台、四cm台にも分散している。

小形は刃部幅二cm台にピークがあり、四cm台にも分散して集中する。

全体的に見れば大きさ(長さ)の大小を問わず、刃部幅二cm台計四八点、三cm台計四二点、四cm台計五〇点とほぼ等量の分布が見られ、刃部幅二〜四cmの合計一四〇点は図化一八二点中の七七%を占める。これに五cm台の二二点を加えると合計一六二点となり、刃部幅二〜五cm台が八九%を占めることとなる。

そのうえで大きさ(長さ)に対する各ピークは僅かな差ではあるが比例する形で小形は二cm台―中形は三cm台―大形は四cm台という移動推移を見ることができ。

このように十王堂免礫斧からは刃部幅を数値化することができ、その結果から、刃部は幅

長さ \ 刃部幅	1 cm未満 (2点)	1 cm台 (12点)	2 cm台 (48点)	3 cm台 (42点)	4 cm台 (50点)	5 cm台 (22点)	6 cm台 (5点)	7 cm台 (1点)
大形 (64点)	0	1	12	15	18	13	4	1
中形 (66点)	1	3	17	19	17	8	1	0
小形 (52点)	1	8	19	8	15	1	0	0
小計	2	12	48	42	50	22	5	1

表5 十王堂免礫斧の刃部幅と長さ分類表 (図化資料 182点)

二〜五cm内にほぼ限られ中でも二〜四cm内の幅狭のものに集中することが明らかとなった。そしてその中で認められる「平・曲刃」、「尖・細刃」の刃部形態二者は、使用上の対象（土壌等）に関わる道具としての細かい使い分けに起因するものと理解され、文中でも述べたように刃部形態による使用対象の違いはないものと考えられるのである。

(7) 今回の整理研究によって両刃の礫斧は六二点出土しており、総数三七三点中一七%を占めている。そして表1、表2に見るように数は多くないが、各分類中において一定量存在することが明確になった。

ここでは両刃のあり方について分類項目から見てみたい。

まず表1の打製と表2の磨製の大分類から見て、打製の1・2類A種では二九四点中、片刃二五九点、両刃三五点であり、八八%と一二%となり、両刃の比率が極めて低いことがわかる。

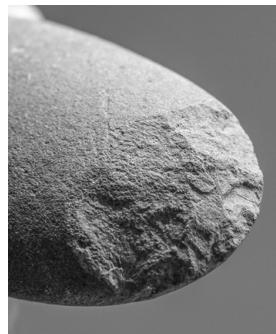
磨製の1・2類B種では七九点中、片刃五二点、両刃二七点であり、六六%と三四%となり磨製では両刃の比率が極めて高くなるのが指摘できる。さらに磨製分類を細かく見ると、1類B種片刃二九点に対して両刃一二点では、七二%と二九%であるが、2類B種片刃二二点に対して両刃一五点では六一%と三九%となり両刃の割合が最も高いのはこの2類B種となる。

なお両刃の製作については、冒頭で指摘し各別で観察したように、蛤刃状の両刃と片刃状の両刃の2種が認められるが、中間形態もあり今回の分析では数値化できなかった。ただし両刃目的として作ったものと、片刃↓両刃への刃部再生によるものとが混じていると考えられるが、相対的に片刃状の両刃が多いことから1類A種片刃使用から刃部裏面に再加工を施す両刃への流れが多かった可能性が考えられよう。

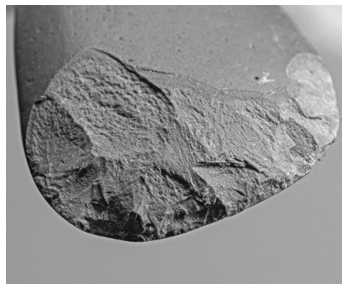
(戸田)



刃部拡大 No.15
1-A片刃(打製)



刃部拡大 No.44
1-A片刃(打製)



刃部拡大 No.60
1-A片刃(打製)



刃部拡大 No.163
2-B片刃(磨製)



刃部拡大 No.140
1-B片刃(磨製)



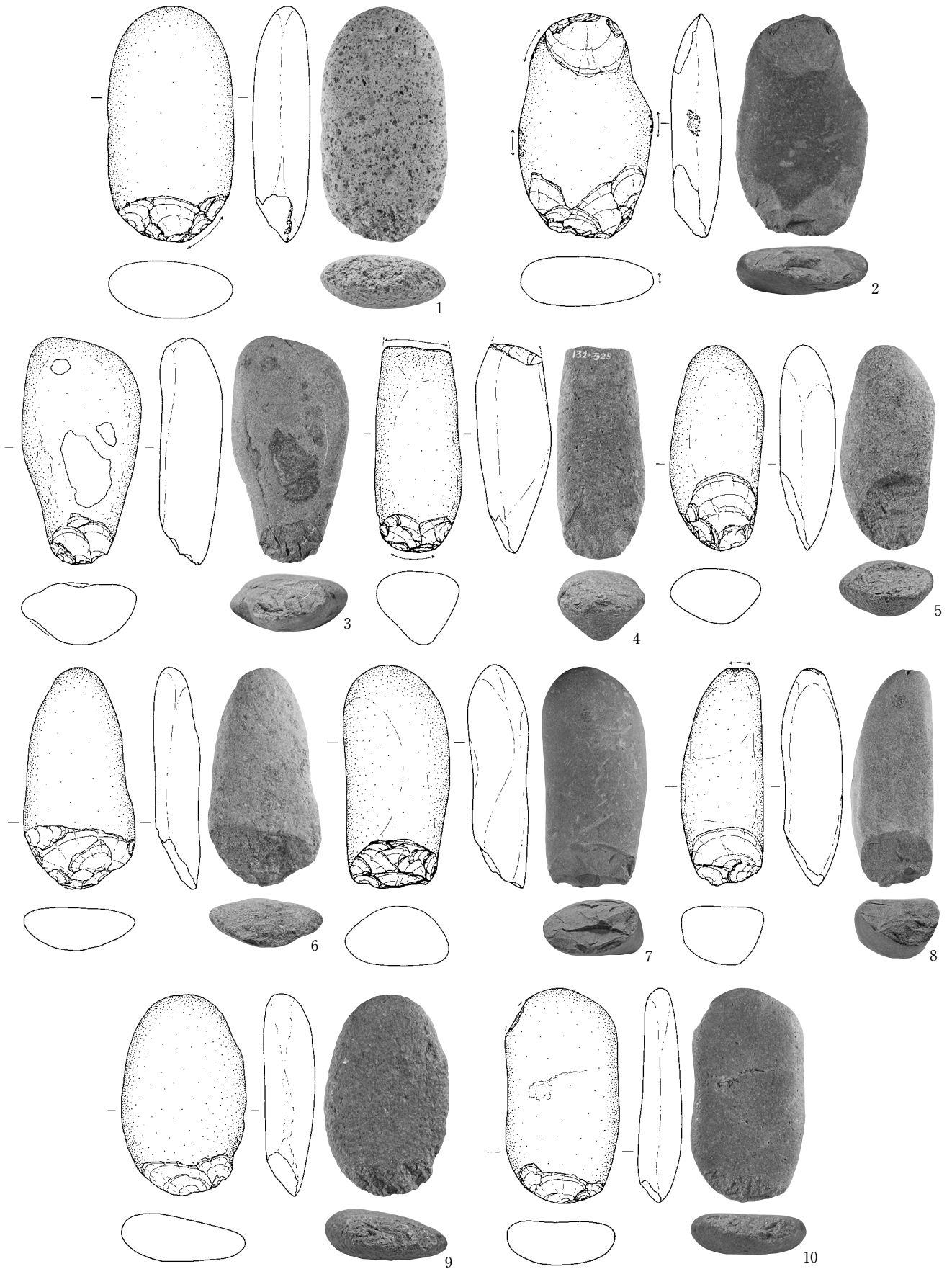
刃部拡大 No.135
1-B片刃(磨製)



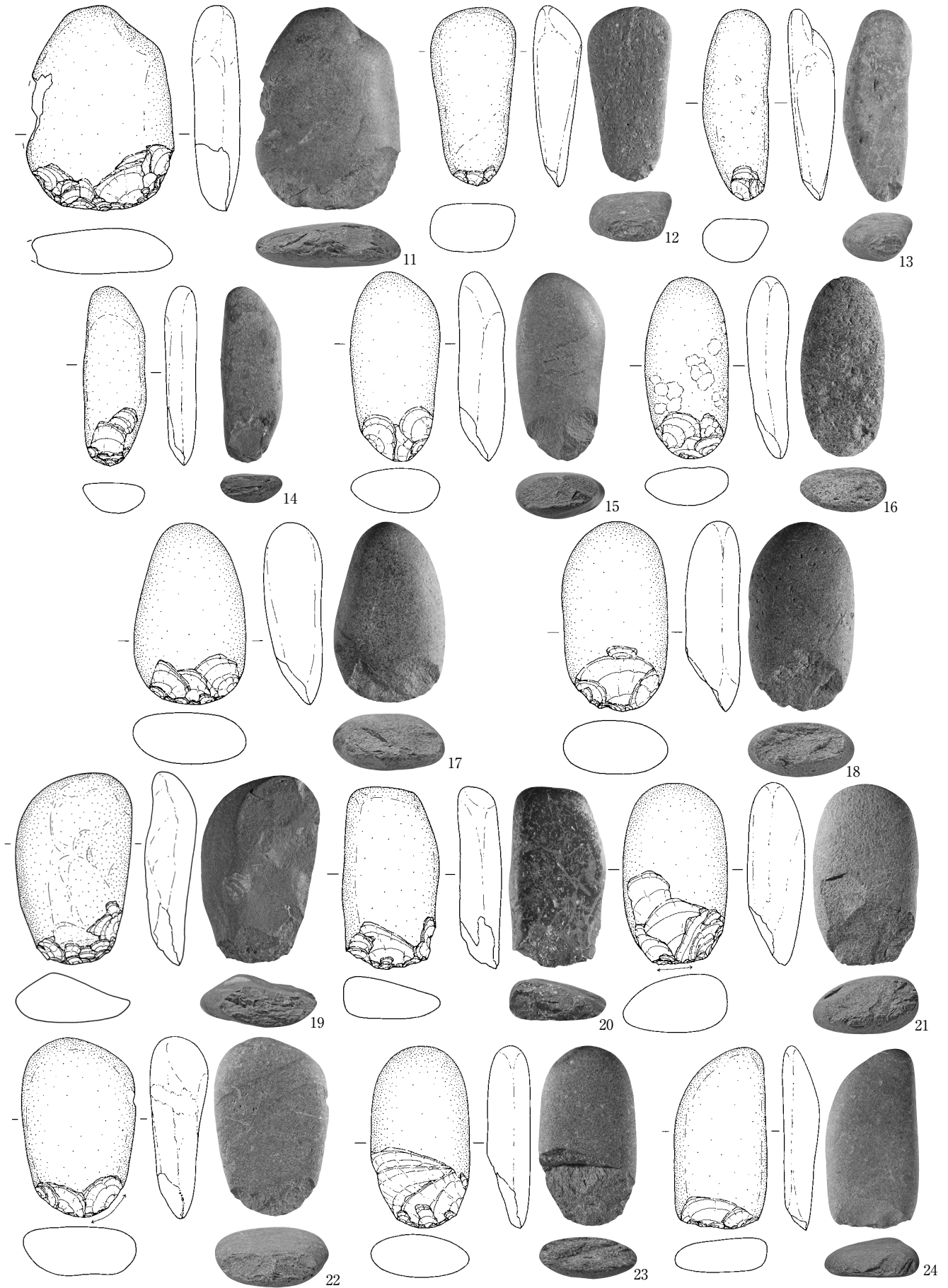
刃部拡大 No.151
1-B両刃(磨製)



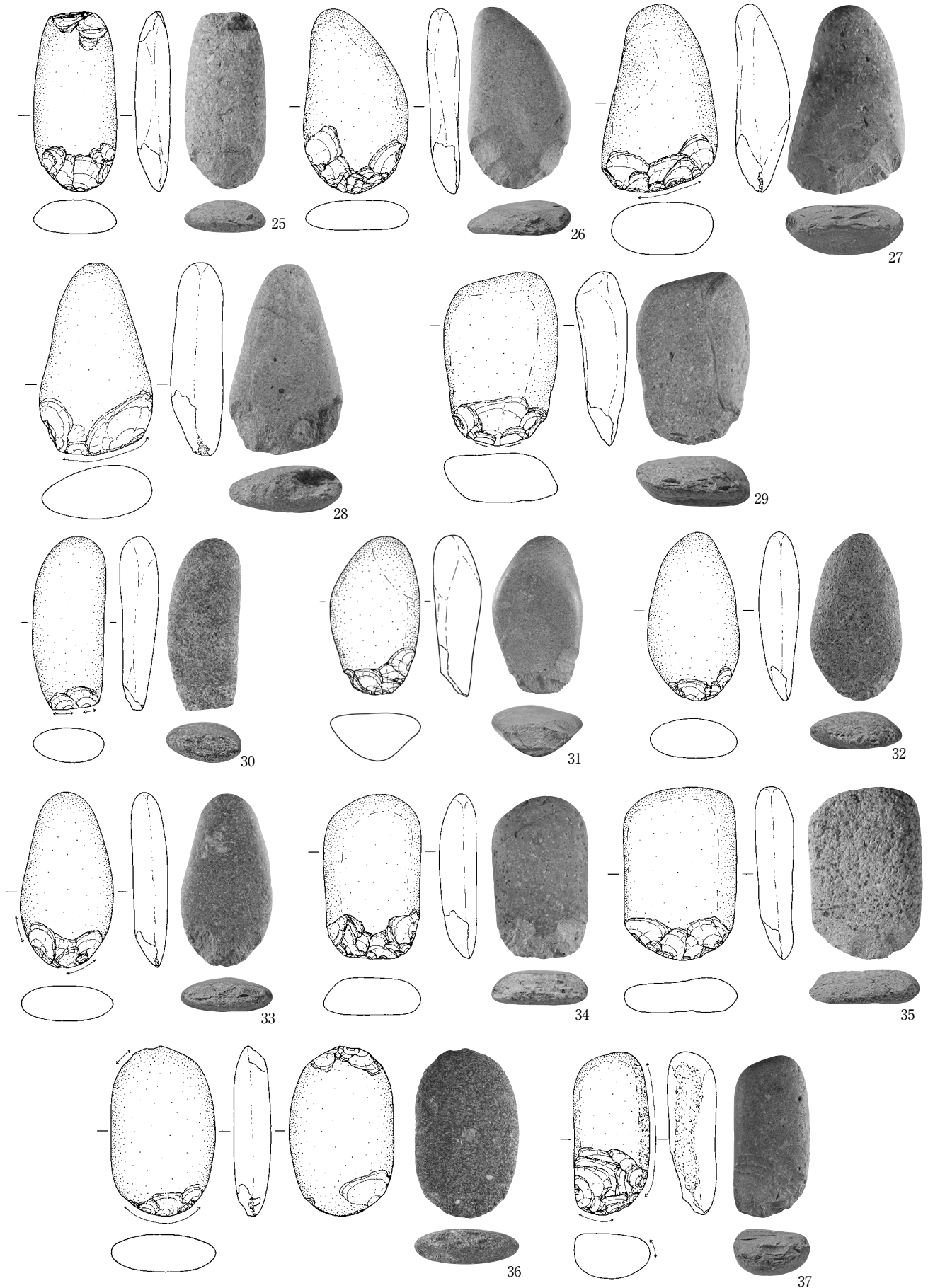
刃部拡大 No.141
1-B片刃(磨製)



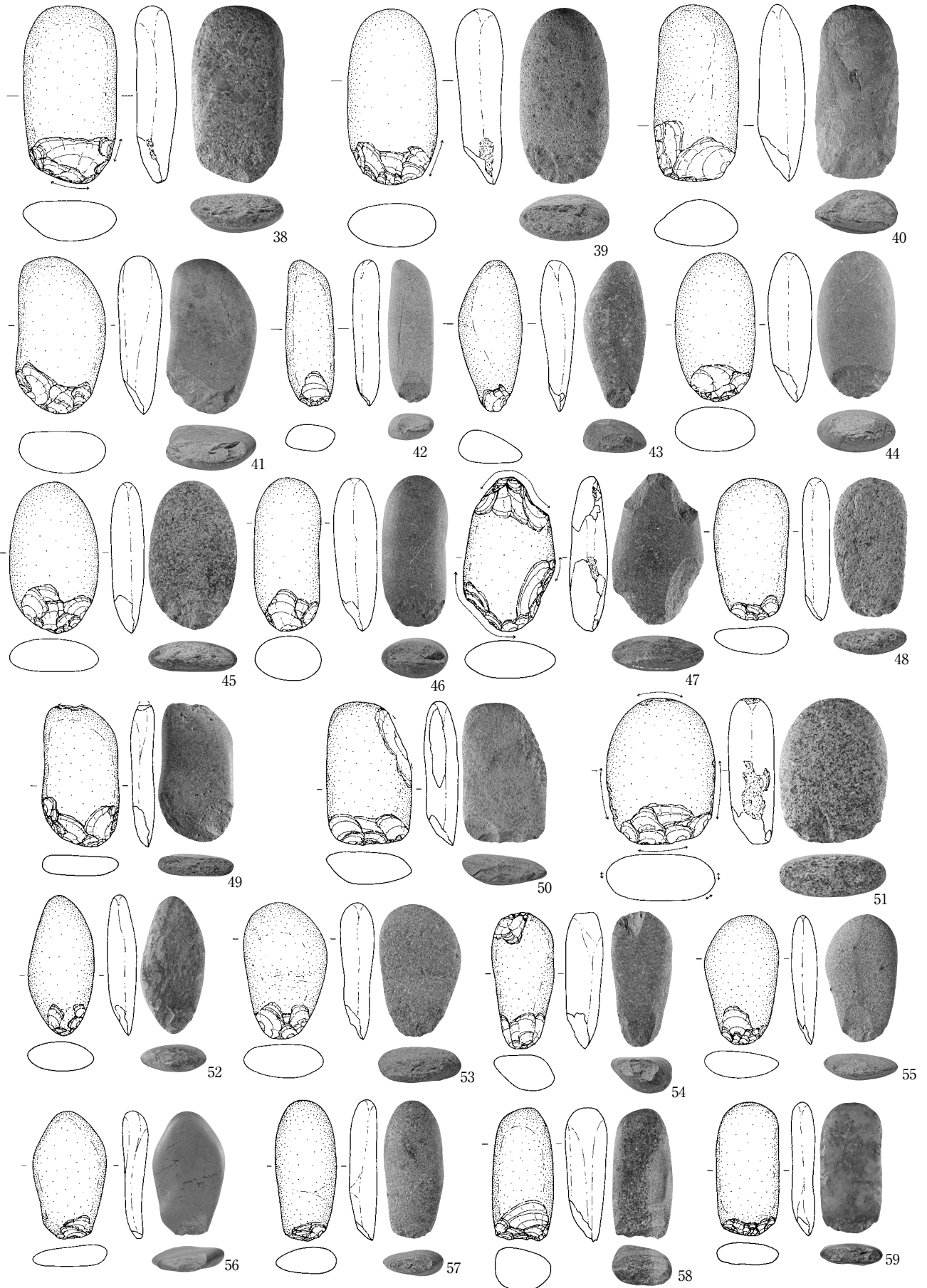
第2図 1類A種片刃、大形その1 (1~10) (S=1/3)



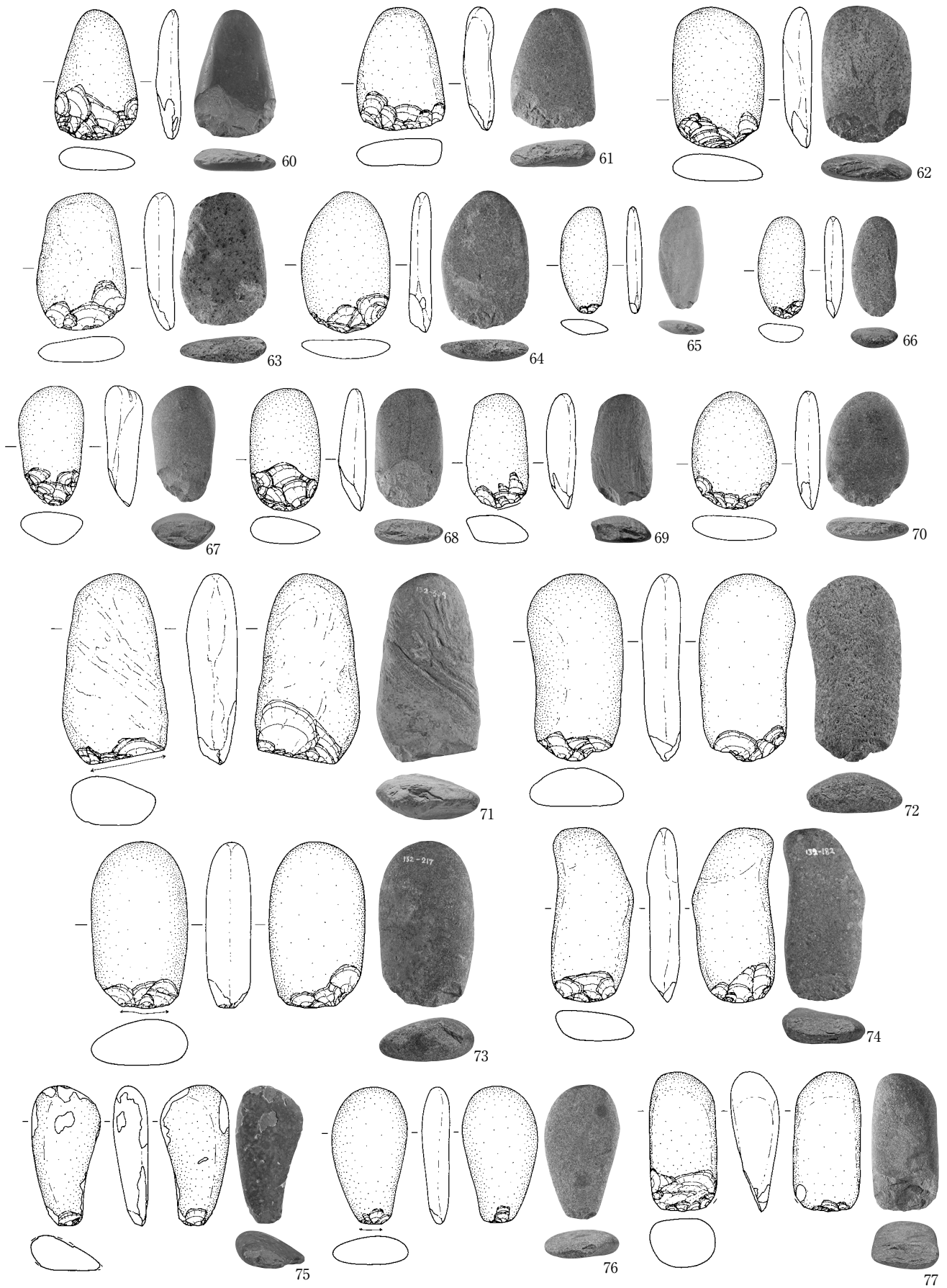
第3図 1類A種片刃、大形その2 (11～24) (S = 1 / 3)



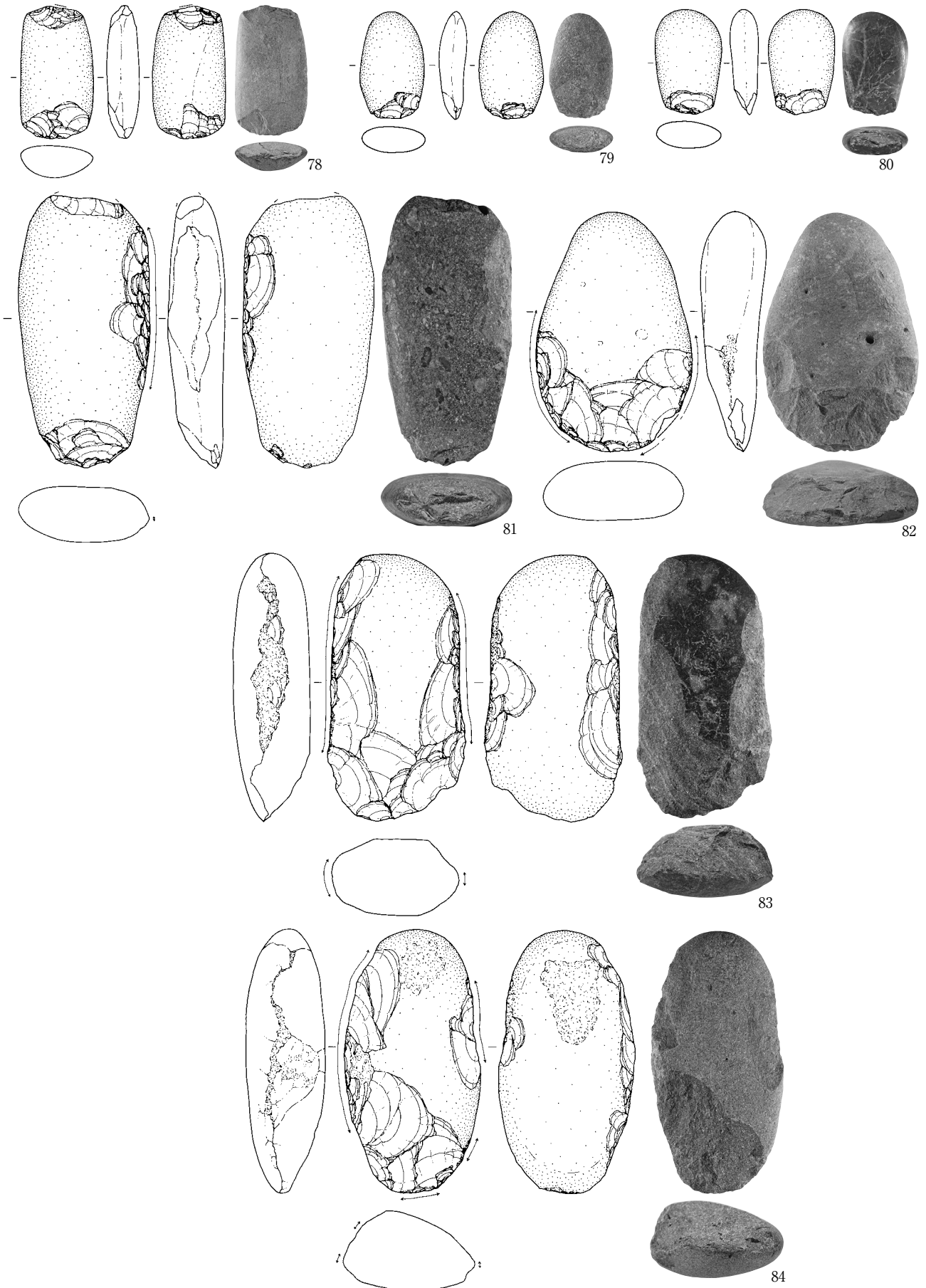
第4図 1類A種片刃、大形その3 (25~28)・中形その1 (29~37) (S=1/3)



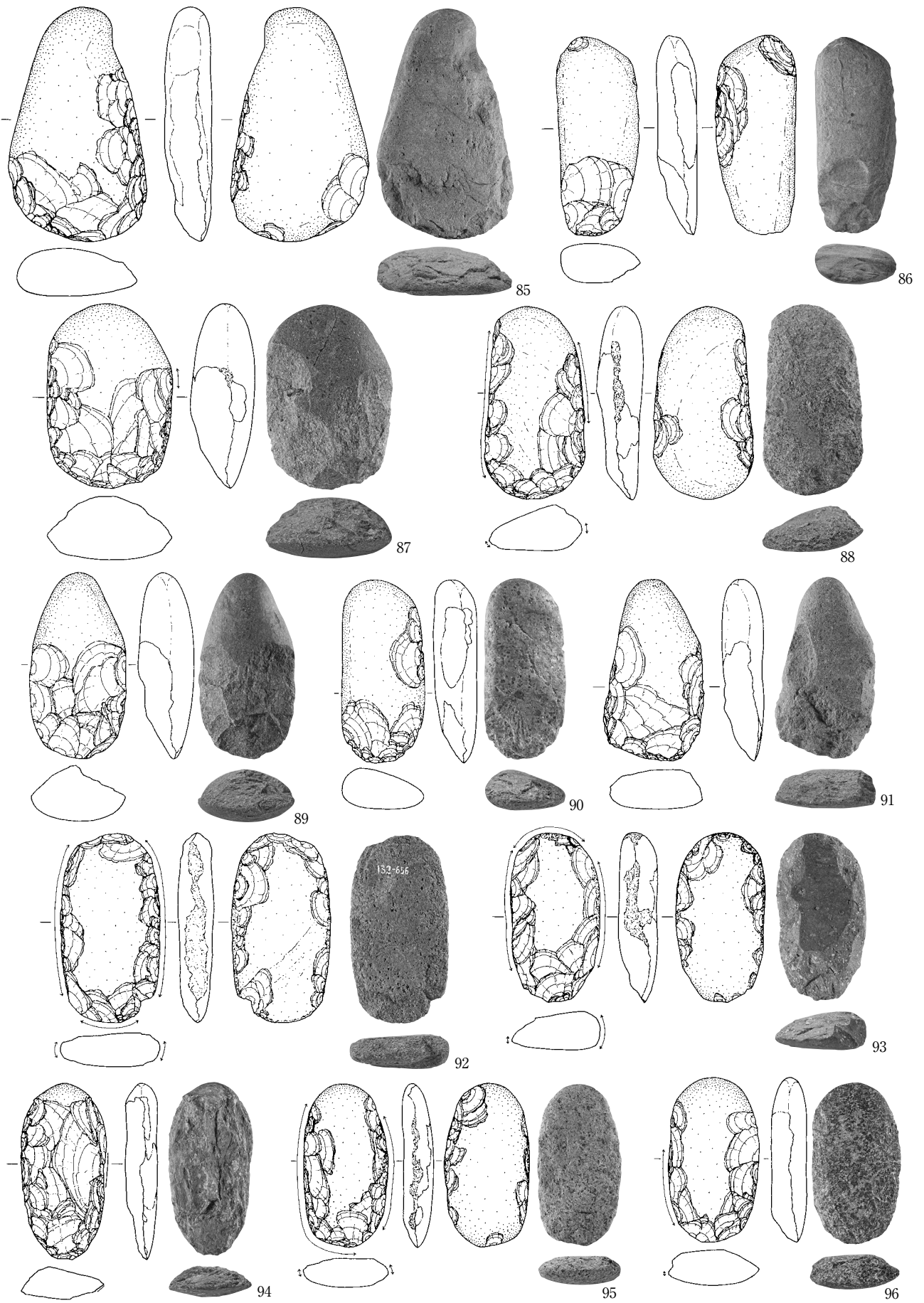
第5図 1類A種片刃、中形その2 (38～51)・小形その1 (52～59) (S = 1 / 3)



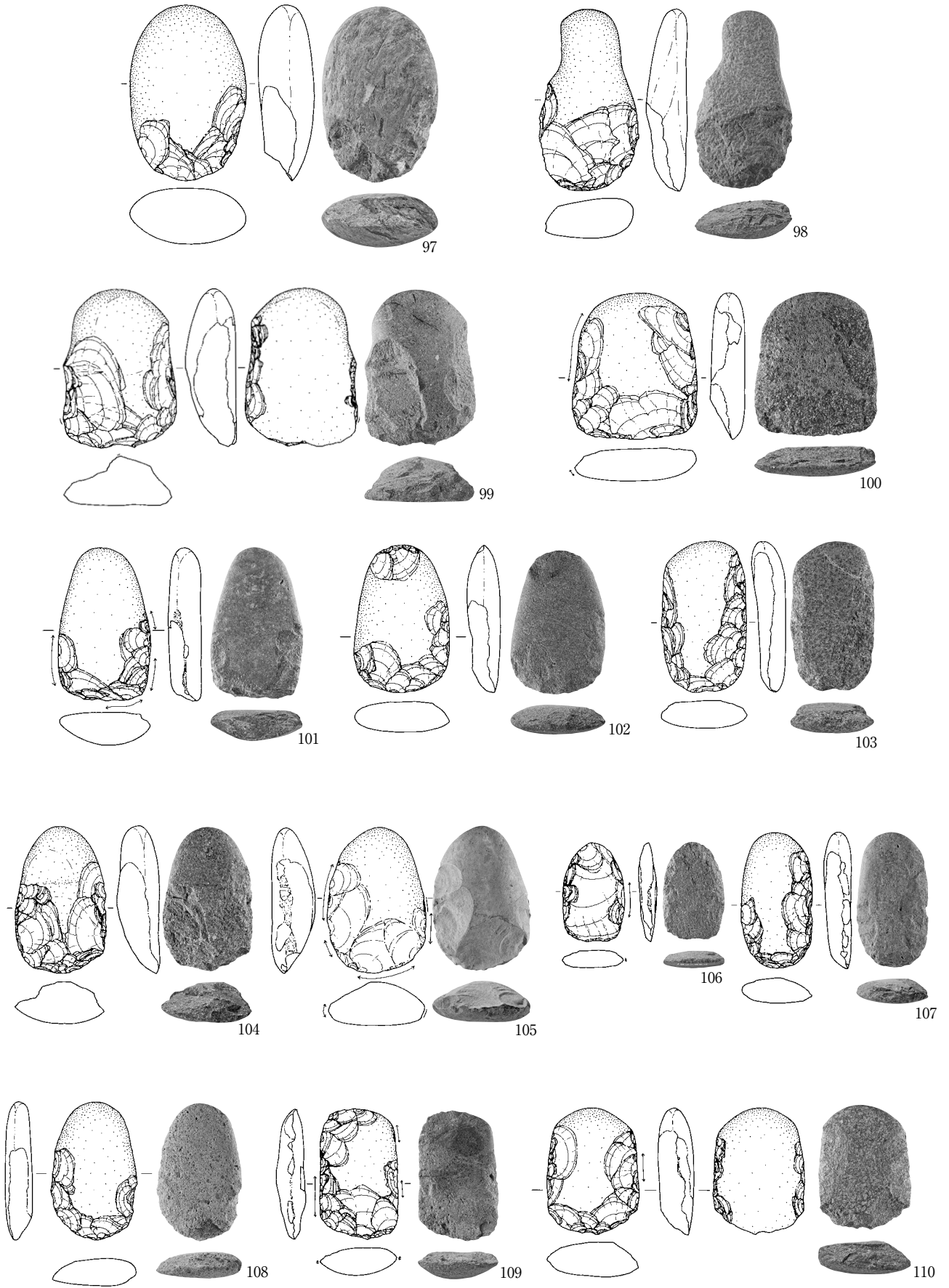
第6図 1類A種片刃、小形その2 (60～70)、1類A種両刃、大形 (71・72)・中形 (73・74)・小形その1 (75～77)
(S = 1 / 3)



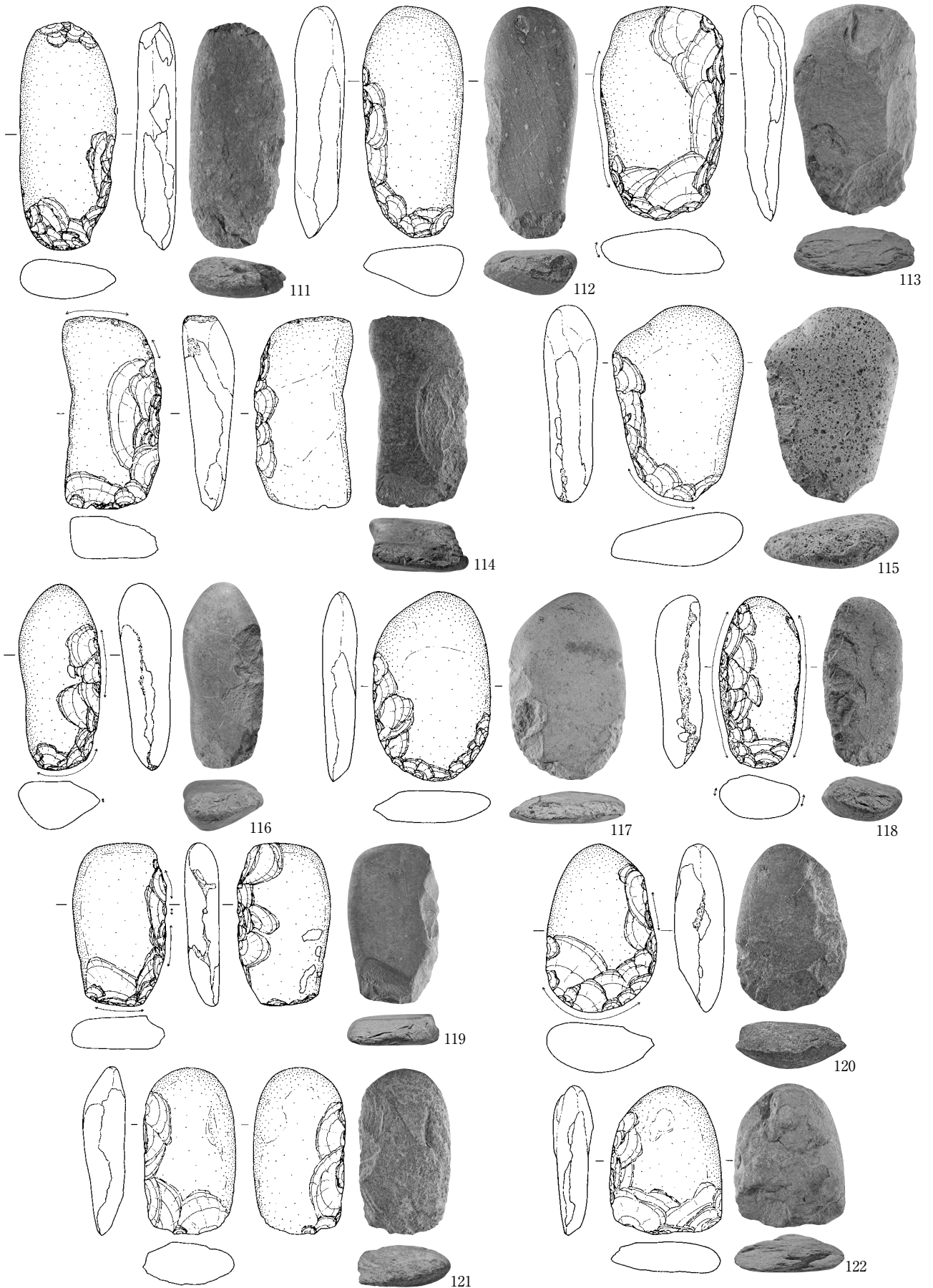
第7図 1類A種両刃、小形その2 (78～80)、2類A種片刃、大形その1 (81～84) (S = 1 / 3)



第8図 2類A種片刃、大形その2 (85～92)・中形その1 (93～96) (S = 1 / 3)



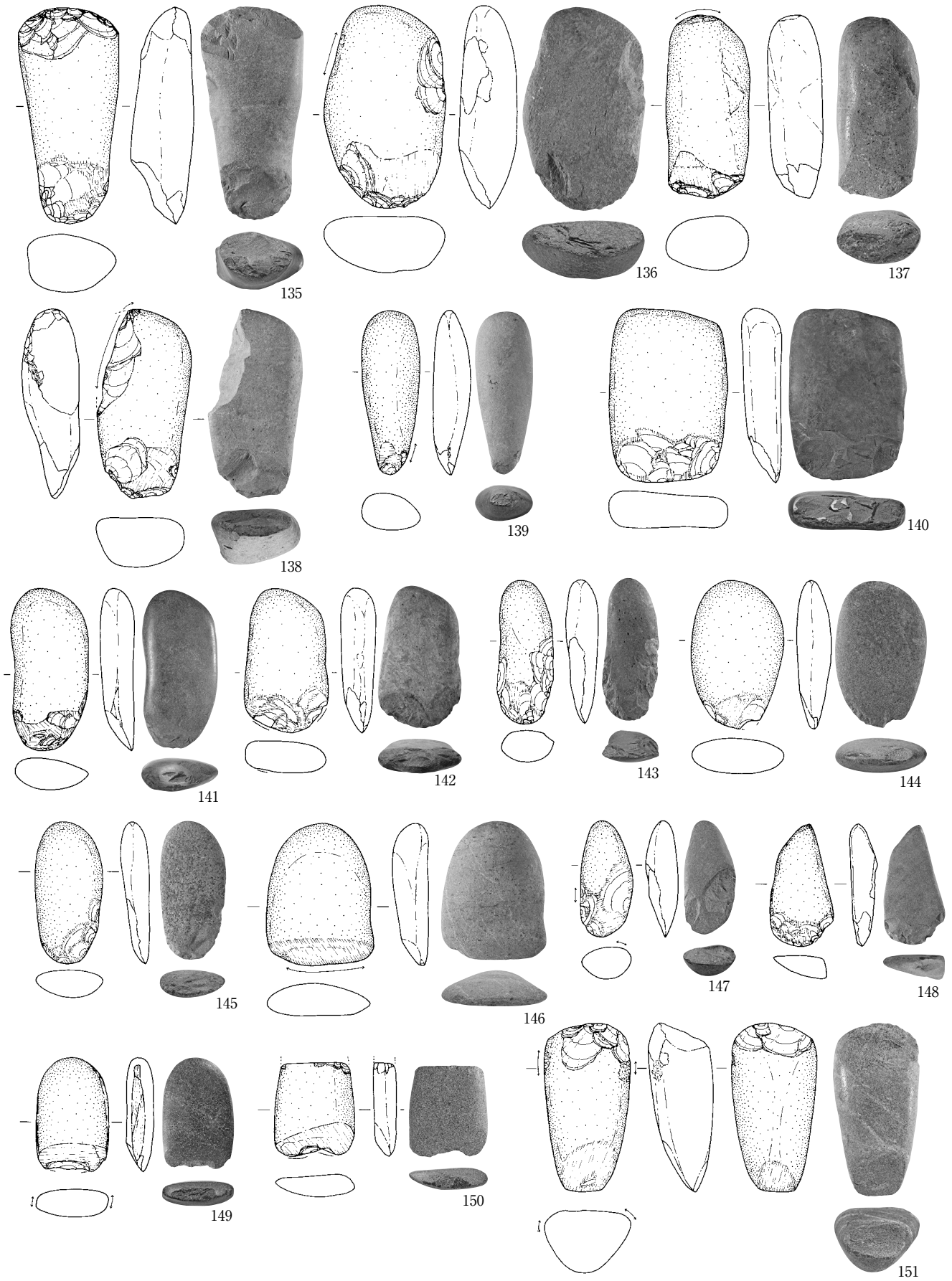
第9図 2類A種片刃、中形その2 (97～105)・小形 (106～110) (S = 1 / 3)



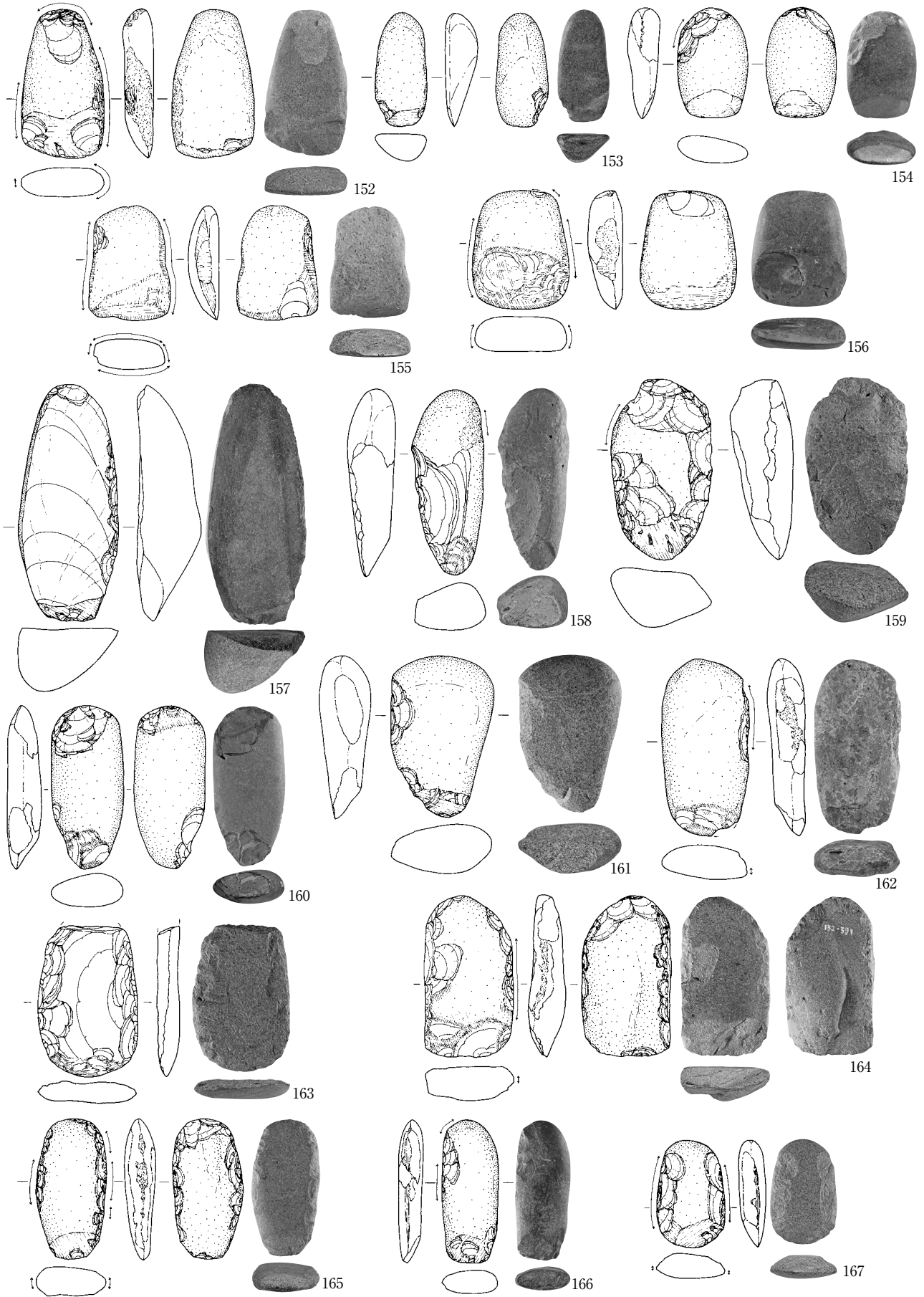
第10図 2類A種 L字状加工片刃、大形(111~117)・中形(118~122)(S=1/3)



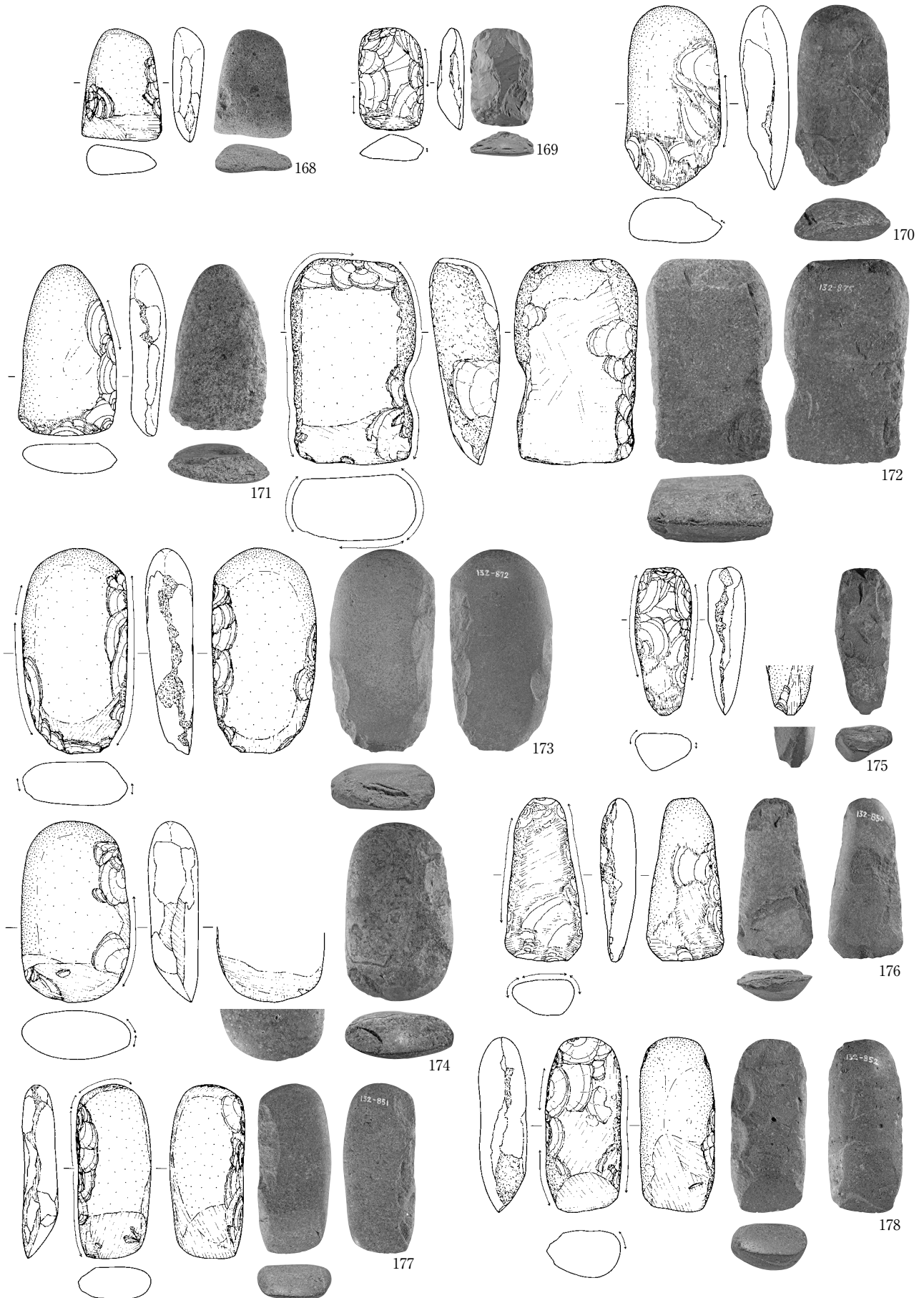
第11図 2類A種L字状加工片刃、小形(123～125)、2類A種両刃、大形(126・127)・中形(128～131)・小形(132)、1類B種片刃、大形その1(133・134)(S=1/3)



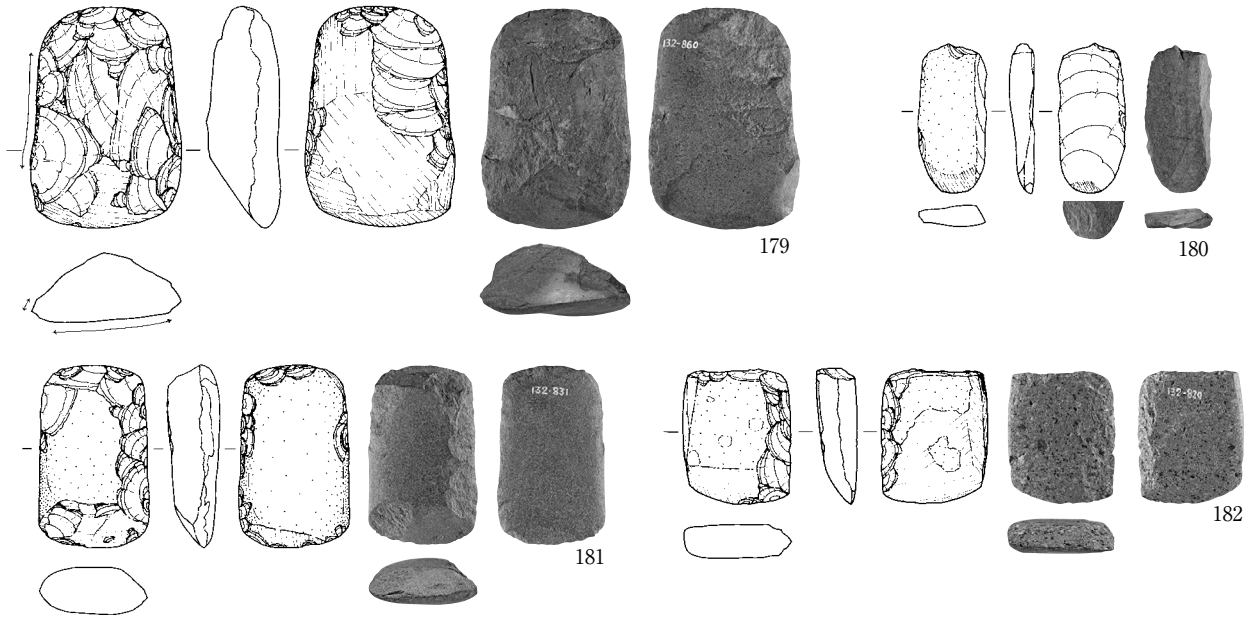
第12図 1類B種片刃、大形その2 (135～138)・中形 (139～144)・小形 (145～150)、
1類B種両刃、中形その1 (151) (S=1/3)



第13図 1類B種両刃、中形その2 (152)・小形 (153～156)、
2類B種片刃、大形 (157～159)・中形 (160～164)・小形その1 (165～167) (S = 1 / 3)



第14図 2類B種片刃、小形その2 (168・169)、2類B種L字状加工片刃、大形 (170)・中形 (171)、2類B種両刃、大形 (172～174)・中形その1 (175～178) (S = 1/3)



第15図 2類B種両刃、中形その2 (179)・小形 (180～182) (S = 1 / 3)

表6 十王堂免遺跡の礫斧観察表

石器番号	分類			大きさ (cm)				刃部幅 (cm)	重量 (g)	石材	目録番号	資料番号	
	類	種	刃部断面	大きさ	刃部平面	長さ	幅						厚さ
第2図-1	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	13.0	6.9	3.2	5.4	466.5	石英斑岩	1-3-048	CX0007150
第2図-2	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	12.5	7.4	2.8	5.3	354.0	砂岩	132-310	CX0002323
第2図-3	1類	A	片刃	大形	尖・細刃	12.5	6.6	3.5	2.9	354.5	砂岩	132-313	CX0002326
第2図-4	1類	A	片刃	大形	尖・細刃	11.3	4.8	4.1	3.0	312.0	砂岩	132-325	CX0002338
第2図-5	1類	A	片刃	大形	尖・細刃	11.2	5.2	3.1	2.4	249.7	凝灰岩	132-253	CX0002266
第2図-6	1類	A	片刃	大形	尖・細刃	12.2	6.1	2.6	5.3	256.7	砂岩	132-289	CX0002302
第2図-7	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	12.3	5.8	3.3	4.0	399.5	凝灰岩	132-326	CX0002339
第2図-8	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	12.0	4.5	3.3	3.0	296.5	凝灰岩	132-242	CX0002337
第2図-9	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	11.0	6.9	2.8	5.5	319.5	礫岩	132-252	CX0002265
第2図-10	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	11.8	6.3	2.4	3.9	263.6	砂岩	132-269	CX0002282
第3図-11	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	11.5	8.3	2.6	6.0	390.0	玄武岩	132-319	CX0002332
第3図-12	1類	A	片刃	大形	尖・細刃	10.0	4.8	2.7	2.3	185.5	安山岩	1-3-032	CX0007147
第3図-13	1類	A	片刃	大形	尖・細刃	10.7	3.8	2.6	1.5	142.8	凝灰岩	1-3-034	CX0007148
第3図-14	1類	A	片刃	大形	尖・細刃	10.0	3.5	1.8	2.0	87.0	ホルンフェルス	132-162	CX0002175
第3図-15	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.6	5.0	2.6	2.7	209.7	凝灰岩	132-287	CX0002300
第3図-16	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.2	4.7	2.4	2.5	166.7	玄武岩	132-233	CX0002246
第3図-17	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.2	6.3	3.3	4.7	317.0	玄武岩	132-305	CX0002318
第3図-18	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.6	5.9	3.1	5.4	314.0	閃緑岩	132-295	CX0002308
第3図-19	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.7	6.6	2.8	3.7	231.2	ホルンフェルス	132-403	CX0002416
第3図-20	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.2	5.4	2.5	3.5	216.8	珪質頁岩	1-3-041	CX0007149
第3図-21	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.2	5.9	3.3	3.4	266.5	ホルンフェルス	132-294	CX0002307
第3図-22	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.1	6.4	3.3	4.3	288.4	砂岩	132-265	CX0002278
第3図-23	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.2	5.5	2.4	3.4	196.5	閃緑岩	132-285	CX0002298
第3図-24	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.2	5.2	2.0	4.1	176.6	凝灰岩	132-303	CX0002316
第4図-25	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.0	4.6	2.0	3.9	143.4	礫岩	132-284	CX0002297
第4図-26	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.3	6	1.8	4.6	153.0	砂岩	132-251	CX0002264
第4図-27	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.5	6.5	3.0	5.5	289.2	凝灰岩	132-267	CX0002280
第4図-28	1類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.8	6.4	3.0	5.1	260.9	凝灰岩	132-258	CX0002271
第4図-29	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.7	6.4	2.9	3.4	264.8	礫岩	132-307	CX0002320
第4図-30	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	9.7	4.1	2.2	2.9	132.4	閃緑岩	132-204	CX0002217
第4図-31	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	9.0	5.0	2.7	2.5	163.0	砂岩	132-281	CX0002294
第4図-32	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	9.4	5.2	2.3	2.9	155.5	玄武岩	1-3-024	CX0007146
第4図-33	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	9.8	5.2	1.9	2.1	149.8	凝灰岩	132-283	CX0002296
第4図-34	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.2	5.5	2.1	4.2	172.8	石英斑岩	132-246	CX0002259
第4図-35	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.7	6.4	2.1	5.2	208.1	玄武岩	132-256	CX0002269
第4図-36	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.6	5.9	2.1	3.9	192.1	閃緑岩	132-272	CX0002285
第4図-37	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	9.1	4.3	2.8	3.4	185.4	砂岩	132-159	CX0002172
第5図-38	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.9	5.2	2.2	3.9	193.0	礫岩	132-293	CX0002306
第5図-39	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.8	5	2.7	3.3	195.0	砂岩	132-227	CX0002240
第5図-40	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.8	4.8	2.6	3.2	172.9	砂岩	132-238	CX0002251

石器番号	分類				大きさ (cm)			刃部幅 (cm)	重量 (g)	石材	目録番号	資料番号	
	類	種	刃部断面	大きさ	刃部平面	長さ	幅						厚さ
第5図-41	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.0	5.0	2.4	3.6	159.2	砂岩	132-181	CX0002194
第5図-42	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	8.1	2.7	1.5	1.4	55.6	砂岩	132-133	CX0002146
第5図-43	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	8.4	3.6	2.0	0.8	71.6	閃緑岩	1-3-019	CX0007145
第5図-44	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	8.3	4.4	2.5	2.9	132.5	砂岩	132-207	CX0002220
第5図-45	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	8.4	4.9	1.8	2.8	115.7	玄武岩	132-171	CX0002184
第5図-46	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	8.5	3.8	2.4	2.7	111.5	砂岩	132-195	CX0002208
第5図-47	1類	A	片刃	中形	尖・細刃	8.6	5.2	2.2	2.6	128.5	砂岩	132-353	CX0002366
第5図-48	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.0	4.2	1.5	2.4	76.3	礫岩	1-3-012	CX0007143
第5図-49	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.0	4.3	1.3	3.3	78.0	閃緑岩	132-185	CX0002198
第5図-50	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.0	4.7	1.8	4.4	106.2	砂岩	132-167	CX0002180
第5図-51	1類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.1	6.0	2.6	4.8	205.6	閃緑岩	132-224	CX0002237
第5図-52	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.8	3.7	1.7	1.6	61.4	頁岩	132-151	CX0002164
第5図-53	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.5	4.7	1.9	2.9	88.2	砂岩	1-3-008	CX0007141
第5図-54	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.6	3.5	2.1	2.1	75.0	砂岩	132-138	CX0002151
第5図-55	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.2	4.2	1.5	2.2	59.8	砂岩	132-139	CX0002152
第5図-56	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.1	4.1	1.5	1.9	50.0	珪質頁岩	132-134	CX0002147
第5図-57	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.8	3.4	1.5	2.3	62.0	閃緑岩	132-157	CX0002170
第5図-58	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.4	3.4	2.3	2.8	93.8	凝灰岩	132-198	CX0002211
第5図-59	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.4	3.5	1.3	2.9	53.0	チャート	132-214	CX0002227
第6図-60	1類	A	片刃	小形	平・曲刃	7.1	4.6	1.3	4.4	51.5	珪質頁岩	132-146	CX0002159
第6図-61	1類	A	片刃	小形	平・曲刃	7.0	4.8	1.5	4.3	86.5	砂岩	132-215	CX0002228
第6図-62	1類	A	片刃	小形	平・曲刃	7.7	5.0	1.6	4.4	98.8	頁岩	132-834	CX0002847
第6図-63	1類	A	片刃	小形	平・曲刃	7.5	4.9	1.7	4.2	87.4	閃緑岩	1-3-013	CX0007144
第6図-64	1類	A	片刃	小形	平・曲刃	7.8	4.9	1.3	3.9	74.0	砂岩	132-184	CX0002197
第6図-65	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	5.8	2.6	0.9	0.8	17.7	砂岩	132-144	CX0002157
第6図-66	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	5.6	2.6	1.1	1.2	24.7	砂岩	132-131	CX0002144
第6図-67	1類	A	片刃	小形	尖・細刃	6.6	3.6	2.1	2.9	61.9	砂岩	132-156	CX0002169
第6図-68	1類	A	片刃	小形	平・曲刃	6.7	3.9	1.5	2.9	54.3	砂岩	132-135	CX0002148
第6図-69	1類	A	片刃	小形	平・曲刃	6.3	3.4	1.6	2.9	45.9	ホルンフェルス	132-343	CX0002356
第6図-70	1類	A	片刃	小形	平・曲刃	6.5	4.7	1.4	4.0	57.8	砂岩	132-145	CX0002158
第6図-71	1類	A	両刃	大形	平・曲刃	10.5	5.8	2.8	4.7	243.8	ホルンフェルス	132-309	CX0002322
第6図-72	1類	A	両刃	大形	平・曲刃	10.3	5.3	2.1	3.7	181.3	閃緑岩	1-3-106	CX0007151
第6図-73	1類	A	両刃	中形	平・曲刃	9.2	5.3	2.5	3.7	198.9	玄武岩	132-217	CX0002230
第6図-74	1類	A	両刃	中形	平・曲刃	9.6	4.6	1.7	3.2	118.6	礫岩	132-182	CX0002195
第6図-75	1類	A	両刃	小形	尖・細刃	7.7	3.8	1.9	1.7	65.0	頁岩	132-155	CX0002168
第6図-76	1類	A	両刃	小形	尖・細刃	7.5	4.2	1.6	1.7	70.5	玄武岩	1-3-010	CX0007142
第6図-77	1類	A	両刃	小形	平・曲刃	7.7	3.8	2.7	2.6	110.1	玄武岩	132-187	CX0002200
第7図-78	1類	A	両刃	小形	平・曲刃	7.4	4.1	1.8	3.5	85.3	砂岩	132-152	CX0002165
第7図-79	1類	A	両刃	小形	平・曲刃	6.0	3.6	1.5	2.6	48.8	閃緑岩	132-141	CX0002154
第7図-80	1類	A	両刃	小形	平・曲刃	5.8	3.8	1.6	2.7	49.3	珪質頁岩	132-149	CX0002162
第7図-81	2類	A	片刃	大形	尖・細刃	15.2	7.4	3.2	4.4	535.0	礫岩	132-426	CX0002439
第7図-82	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	13.3	8.7	3.6	7.3	557.0	凝灰岩	132-320	CX0002333
第7図-83	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	14.9	7.7	4.3	6.8	725.0	砂岩	132-427	CX0002440
第7図-84	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	14.7	7.6	4.4	4.5	639.5	砂岩	132-428	CX0002441
第8図-85	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	13.1	7.7	2.6	6.5	362.5	砂岩	132-419	CX0002432
第8図-86	2類	A	片刃	大形	尖・細刃	11.1	4.6	2.2	2.9	159.7	ホルンフェルス	132-271	CX0002284
第8図-87	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.3	7.0	3.5	5.3	361.0	砂岩	132-422	CX0002435
第8図-88	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.8	5.6	2.5	5.0	203.2	閃緑岩	132-406	CX0002419
第8図-89	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.4	5.4	3.1	4.3	224.6	礫岩	132-404	CX0002417
第8図-90	2類	A	片刃	大形	尖・細刃	10.2	4.6	2.4	4.3	162.9	チャート	132-390	CX0002403
第8図-91	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.1	5.6	2.3	5.1	183.1	砂岩	132-370	CX0002383
第8図-92	2類	A	片刃	大形	平・曲刃	10.6	5.6	2.0	4.7	187.0	閃緑岩	132-656	CX0002669
第8図-93	2類	A	片刃	中形	尖・細刃	9.4	5.0	2.2	2.8	148.7	安山岩	132-363	CX0002376
第8図-94	2類	A	片刃	中形	尖・細刃	9.8	4.8	1.8	2.7	109.4	凝灰岩?	132-498	CX0002511
第8図-95	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.1	4.8	1.7	3.4	114.7	閃緑岩	132-372	CX0002385
第8図-96	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.2	5.1	2.0	3.7	147.4	閃緑岩	132-366	CX0002379
第9図-97	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.6	6.4	3.0	4.0	254.2	礫岩	132-414	CX0002427
第9図-98	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	9.9	5.5	2.2	4.6	134.0	ホルンフェルス	132-176	CX0002189
第9図-99	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.7	6.2	2.7	5.3	193.5	砂岩	132-384	CX0002397
第9図-100	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.0	6.8	1.9	6.2	151.6	安山岩	132-402	CX0002415
第9図-101	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.3	5.0	1.8	3.9	107.4	砂岩	132-359	CX0002372
第9図-102	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.0	5.2	1.8	4.5	106.9	砂岩	132-368	CX0002381
第9図-103	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.2	4.6	1.7	4.1	99.2	閃緑岩	132-360	CX0002373
第9図-104	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.1	5.0	2.3	4.5	120.3	礫岩	132-351	CX0002364
第9図-105	2類	A	片刃	中形	平・曲刃	8.0	5.4	2.3	4.7	132.7	黒色頁岩	132-357	CX0002370
第9図-106	2類	A	片刃	小形	平・曲刃	5.4	3.4	1.0	2.8	24.8	砂岩	132-459	CX0002472
第9図-107	2類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.4	3.9	1.5	2.9	66.3	砂岩	132-347	CX0002360
第9図-108	2類	A	片刃	小形	尖・細刃	7.5	4.7	1.5	4.2	75.7	砂岩	132-348	CX0002361
第9図-109	2類	A	片刃	小形	平・曲刃	7.1	4.3	1.5	4.2	70.7	凝灰岩	132-2074	CX0004085
第9図-110	2類	A	片刃	小形	平・曲刃	6.9	5.1	2.0	4.9	100.4	斑れい岩?	132-350	CX0002363
第10図-111	2類	A	L字状片刃	大形	尖・細刃	12.6	5.3	2.3	2.9	231.0	礫岩	132-418	CX0002431

横浜市十王堂免遺跡の縄文時代礫斧

石器番号	分類					大きさ (cm)			刃部幅 (cm)	重量 (g)	石材	目録番号	資料番号
	類	種	刃部断面	大きさ	刃部平面	長さ	幅	厚さ					
第10図-112	2類	A	L字状片刃	大形	尖・細刃	12.8	5.6	2.8	2.9	289.9	砂岩	132-415	CX0002428
第10図-113	2類	A	L字状片刃	大形	平・曲刃	11.8	6.9	2.5	5.1	257.9	ホルンフェルス	132-420	CX0002433
第10図-114	2類	A	L字状片刃	大形	平・曲刃	10.7	5.5	2.7	4.5	221.4	砂岩	132-409	CX0002422
第10図-115	2類	A	L字状片刃	大形	平・曲刃	10.9	7.3	3.0	4.6	304.0	閃緑岩	132-423	CX0002436
第10図-116	2類	A	L字状片刃	大形	尖・細刃	10.3	4.5	2.9	2.8	178.9	砂岩	132-386	CX0002399
第10図-117	2類	A	L字状片刃	大形	平・曲刃	10.5	6.5	1.9	5.1	193.6	黒色頁岩	132-411	CX0002424
第10図-118	2類	A	L字状片刃	中形	尖・細刃	9.5	4.5	2.4	2.8	155.3	砂岩	132-371	CX0002384
第10図-119	2類	A	L字状片刃	中形	尖・細刃	9.0	5.2	1.9	3.0	142.6	砂岩	132-387	CX0002400
第10図-120	2類	A	L字状片刃	中形	平・曲刃	9.3	6.1	2.7	5.2	214.4	玄武岩	132-405	CX0002418
第10図-121	2類	A	L字状片刃	中形	平・曲刃	9.2	5.1	2.3	4.5	154.6	ホルンフェルス	132-394	CX0002407
第10図-122	2類	A	L字状片刃	中形	平・曲刃	8.2	6.2	2.3	5.9	134.0	ホルンフェルス	132-399	CX0002412
第11図-123	2類	A	L字状片刃	小形	尖・細刃	7.1	3.9	1.4	3.0	54.9	閃緑岩	132-339	CX0002352
第11図-124	2類	A	L字状片刃	小形	尖・細刃	6.6	3.9	1.7	2.7	64.5	閃緑岩	132-337	CX0002350
第11図-125	2類	A	L字状片刃	小形	尖・細刃	5.8	3.8	1.0	3.3	37.5	玄武岩	132-341	CX0002354
第11図-126	2類	A	両刃	大形	平・曲刃	10.1	6.2	2.1	5.2	198.3	玄武岩	132-412	CX0002425
第11図-127	2類	A	両刃	大形	平・曲刃	10.3	4.9	2.4	3.5	174.4	砂岩	132-393	CX0002406
第11図-128	2類	A	両刃	中形	平・曲刃	9.5	4.7	2.5	3.5	152.3	砂岩	132-395	CX0002408
第11図-129	2類	A	両刃	中形	平・曲刃	9.4	4.5	2.6	4.2	170.0	砂岩	132-358	CX0002371
第11図-130	2類	A	両刃	中形	平・曲刃	8.2	5.7	1.8	5.4	114.6	砂岩	132-367	CX0002380
第11図-131	2類	A	両刃	中形	平・曲刃	8.7	5.3	2.6	4.5	161.7	砂岩	132-377	CX0002390
第11図-132	2類	A	両刃	小形	平・曲刃	7.0	4.7	1.6	4.4	71.6	閃緑岩	132-352	CX0002365
第11図-133	1類	B	片刃	大形	尖・細刃	10.1	3.8	2.4	3.0	120.6	礫岩	132-847	CX0002860
第11図-134	1類	B	片刃	大形	尖・細刃	10.4	5.8	3.5	3.3	297.7	砂岩	132-873	CX0002886
第12図-135	1類	B	片刃	大形	尖・細刃	11.9	5.5	3.4	3.0	306.5	砂岩	132-864	CX0002877
第12図-136	1類	B	片刃	大形	平・曲刃	11.2	6.7	3.2	4.1	335.0	ホルンフェルス	132-874	CX0002887
第12図-137	1類	B	片刃	大形	平・曲刃	10.1	4.6	3.0	4.2	241.8	玄武岩	132-862	CX0002875
第12図-138	1類	B	片刃	大形	平・曲刃	10.5	5.2	3.1	3.8	230.4	凝灰岩	132-863	CX0002876
第12図-139	1類	B	片刃	中形	尖・細刃	9.1	3.2	2.1	1.6	82.1	砂岩	132-843	CX0002856
第12図-140	1類	B	片刃	中形	平・曲刃	9.6	6.6	2.2	5.0	244.5	凝灰岩	132-266	CX0002279
第12図-141	1類	B	片刃	中形	尖・細刃	9.0	4.3	1.8	3.2	107.6	砂岩	132-845	CX0002858
第12図-142	1類	B	片刃	中形	平・曲刃	8.0	4.7	2.0	4.0	111.0	頁岩	1-3-453	CX0007152
第12図-143	1類	B	片刃	中形	尖・細刃	8.0	3.1	1.8	2.7	59.7	凝灰岩	132-340	CX0002353
第12図-144	1類	B	片刃	中形	平・曲刃	8.2	5.1	1.9	2.5	118.3	閃緑岩	132-857	CX0002870
第12図-145	1類	B	片刃	小形	尖・細刃	7.8	3.7	1.5	2.6	63.4	砂岩	132-841	CX0002854
第12図-146	1類	B	片刃	小形	平・曲刃	7.8	5.9	1.9	5.8	140.4	凝灰岩	132-855	CX0002868
第12図-147	1類	B	片刃	小形	尖・細刃	6.4	2.9	1.7	2.4	41.4	砂岩	132-835	CX0002848
第12図-148	1類	B	片刃	小形	平・曲刃	6.7	3.5	1.5	3.4	38.4	砂岩	132-822	CX0002835
第12図-149	1類	B	片刃	小形	平・曲刃	6.2	4.0	1.5	3.7	64.0	砂岩	132-827	CX0002840
第12図-150	1類	B	片刃	小形	平・曲刃	5.2	4.4	1.3	4.2	53.3	砂岩	132-817	CX0002830
第12図-151	1類	B	両刃	中形	尖・細刃	9.3	4.7	3.5	2.0	196.5	砂岩	132-861	CX0002874
第13図-152	1類	B	両刃	中形	平・曲刃	8.2	4.6	1.7	4.2	102.4	凝灰岩	132-830	CX0002843
第13図-153	1類	B	両刃	小形	尖・細刃	6.3	2.9	1.8	1.7	41.8	砂岩	132-836	CX0002849
第13図-154	1類	B	両刃	小形	平・曲刃	6.0	3.9	1.7	2.9	61.8	砂岩	132-818	CX0002831
第13図-155	1類	B	両刃	小形	平・曲刃	6.3	4.5	1.7	4.1	75.2	礫岩	132-825	CX0002838
第13図-156	1類	B	両刃	小形	平・曲刃	6.6	5.5	1.9	4.7	114.1	砂岩	132-829	CX0002842
第13図-157	2類	B	片刃	大形	尖・細刃	13.1	5.5	3.5	2.7	324.0	砂岩	132-859	CX0002872
第13図-158	2類	B	片刃	大形	尖・細刃	10.2	4.0	2.7	2.1	137.9	砂岩	132-373	CX0002386
第13図-159	2類	B	片刃	大形	尖・細刃	10.0	5.6	3.3	4.2	228.5	砂岩	132-871	CX0002884
第13図-160	2類	B	片刃	中形	尖・細刃	9.0	4.0	1.9	2.4	103.7	砂岩	132-832	CX0002845
第13図-161	2類	B	片刃	中形	尖・細刃	9.0	5.7	2.8	2.5	190.1	閃緑岩	132-867	CX0002880
第13図-162	2類	B	片刃	中形	平・曲刃	9.8	4.9	2.1	3.5	153.2	礫岩	132-376	CX0002389
第13図-163	2類	B	片刃	中形	平・曲刃	8.3	5.5	1.2	4.4	89.4	砂岩	132-856	CX0002869
第13図-164	2類	B	片刃	中形	平・曲刃	8.9	5.0	2.0	4.6	140.2	砂岩	132-391	CX0002404
第13図-165	2類	B	片刃	小形	尖・細刃	7.7	3.9	1.7	1.8	68.8	砂岩	132-840	CX0002853
第13図-166	2類	B	片刃	小形	尖・細刃	7.9	3.1	1.4	2.3	50.9	頁岩	132-838	CX0002851
第13図-167	2類	B	片刃	小形	平・曲刃	6.0	3.8	1.5	3.2	48.2	玄武岩	132-824	CX0002837
第14図-168	2類	B	片刃	小形	平・曲刃	6.2	4.4	1.7	4.4	65.0	安山岩	132-826	CX0002839
第14図-169	2類	B	片刃	小形	平・曲刃	5.6	3.6	1.5	3.2	41.8	凝灰岩	132-819	CX0002832
第14図-170	2類	B	L字状片刃	大形	尖・細刃	10.1	5.3	2.6	4.5	197.2	安山岩	132-398	CX0002411
第14図-171	2類	B	L字状片刃	中形	平・曲刃	9.4	5.4	2.0	5.2	142.1	閃緑岩	132-397	CX0002410
第14図-172	2類	B	両刃	大形	平・曲刃	11.4	6.9	3.7	6.0	503.5	凝灰岩	132-875	CX0002888
第14図-173	2類	B	両刃	大形	平・曲刃	11.4	5.9	2.6	3.4	295.5	凝灰岩	132-872	CX0002885
第14図-174	2類	B	両刃	大形	平・曲刃	10.0	6.0	2.8	4.8	267.4	礫岩	132-868	CX0002881
第14図-175	2類	B	両刃	中形	尖・細刃	8.1	3.2	2.1	1.5	65.7	砂岩	132-844	CX0002857
第14図-176	2類	B	両刃	中形	平・曲刃	9.0	4.3	2.0	4.1	100.4	砂岩	132-850	CX0002863
第14図-177	2類	B	両刃	中形	平・曲刃	9.6	4.2	2.0	3.2	133.2	砂岩	132-851	CX0002864
第14図-178	2類	B	両刃	中形	平・曲刃	9.7	4.2	2.7	3.4	177.6	砂岩	132-852	CX0002865
第15図-179	2類	B	両刃	中形	平・曲刃	8.7	6.0	3.0	5.2	201.7	砂岩	132-860	CX0002873
第15図-180	2類	B	両刃	小形	尖・細刃	6.0	2.7	1.0	1.9	17.3	ホルンフェルス	132-815	CX0002828
第15図-181	2類	B	両刃	小形	平・曲刃	7.2	4.4	2.1	4.3	99.9	凝灰岩	132-831	CX0002844
第15図-182	2類	B	両刃	小形	平・曲刃	5.3	4.3	1.6	4.0	60.8	石英斑岩	132-820	CX0002833

(観察表作成 中山)

謝辞

本稿をまとめるにあたり、藤山龍造氏、島田和高氏にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

註

(1) 芹沢は本遺跡を「赤穂原遺跡」と呼称している。十王堂免遺跡と赤穂原遺跡の位置関係については千葉(二〇一六)で整理し、芹沢による発掘調査地点が林の採集範囲に含まれることを確認した。今日では芹沢による「赤穂原遺跡」との呼称が使用されることも多いが、本稿では林にない十王堂免遺跡としておく。

引用・参考文献

- 岡本 勇 一九六五「縄文時代の生活と社会 労働用具」『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社
- 杉原壮介・芹沢長介 一九五七「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」『明治大学文学部研究報告』考古学第二冊
- 鈴木啓介 二〇〇三「江ノ島植物園内(藤沢市No.1)遺跡」『湘南考古学同好会々報』九〇、湘南考古学同好会
- 芹沢長介 一九五六「神奈川県大丸遺跡の研究」『駿台史学』第七号、駿台史学会
- 芹沢長介 一九六二「神奈川県横浜市赤穂原遺跡」『日本考古学年報』十一、日本考古学協会
- 千葉 毅 二〇一六「神奈川県立歴史博物館所蔵の縄文時代擦糸文期土器群—林國治氏旧蔵の横浜市十王堂免遺跡採集資料—」『神奈川県立博物館研究報告(人文科学)』第四十三号、神奈川県立歴史博物館
- 千葉 毅 二〇一八「それぞれの五〇年 学芸部 原始・古代—考古」『神奈川県立歴史博物館・神奈川県立歴史博物館 五〇年のあゆみ』神奈川県立歴史博物館
- 戸田哲也・中山 豊・齊藤武士 二〇二二「江ノ島植物園内遺跡第1次調査」『神奈川県藤沢市 藤沢市埋蔵文化財発掘調査概要集』藤沢市教育委員会
- 戸田哲也・中山 豊 二〇一九「藤沢市江ノ島植物園内遺跡の礫斧」『神奈川を掘るⅢ』玉川文化財研究所
- 林 國治 一九七七『昭和五十二年記 横浜の遺跡名表と石鏃採集数控え』(私家本)

横浜開港資料館所蔵 請求番号：林資料十二

林 國治 一九七九『昭和五十四年記 私の考古学付記』(私家本) 横浜開港資料館

所蔵 請求番号：林資料十八

原田昌幸 一九八八「木工具としての擦糸文期の(礫斧)について」『竹篋』第五号、

北総たけべらの会

宮崎朝雄 一九八一「擦糸文文化の石器について」『奈和』第十九号、奈和同人会

『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』編集等に関する規程

- 一 神奈川県立歴史博物館は、『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』（以下、『研究報告』）を、毎年次に一号発行する。
- 二 考古・歴史・美術・民俗などの専門的研究に資することを目的として、『研究報告』は発行する。
- 三 『研究報告』を発行するにあたり、当館研究活動推進会議内に編集委員会を設ける。編集委員は、学芸部長及び学芸員若干名で構成する。
- 四 編集委員会は『研究報告』の編集作業を行い、研究活動推進会議から館長に報告する。
- 五 執筆する資格を有する者は、当館学芸員並びに編集委員会が認めたとする。
- 六 掲載する原稿の種類は、研究論文、研究ノート、資料紹介とする。
- 七 研究論文の掲載にあたっては、査読を行う。
- 八 査読は、外部の専門知識を有する研究者を含む二名以上の査読委員をもって行う。
- 九 査読委員は、編集委員会が適任と判断する者を選し、館長が委嘱する。
- 十 『研究報告』を発行するにあたり、別途、査読や執筆に係る内規を館長が定める。

『神奈川県立博物館研究報告－人文科学－』第47号編集委員会

編集委員 望月一樹、千葉 毅、寺西明子

神奈川県立博物館研究報告
人文科学 第47号

令和2年12月17日 印刷

令和2年12月25日 発行

編集／発行 神奈川県立歴史博物館
(旧神奈川県立博物館)
横浜市中区南仲通5-60
電話 045(201)0926
印刷 株式会社 ワールドフジ

BULLETIN OF THE KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

*Cultural Sciences**No.47***Contents****Article**

WATANABE, Hiroki:

Music in the Early Kamakura Shogunate and Kyoto Society

— A Type of Music Appreciation by “Inviting Musicians” and its Foundation — (1)

Material

TODA, Tetsuya, NAKAYAMA, Yutaka and CHIBA, Tsuyoshi:

Jomon Stone Tools “Reki-fu (Stone Axe) ” from Juodomen Site

— the HAYASHI, Kuniharu Collection — (23)

KAKEHASHI, Hiroto:

The Letter from HOJO Ujinori on 23rd Sep. (57)

KOMIYA, Masaaki:

On Unintroduced Historical Materials of the Areas, *Kanaijima-mura Village, Minasegawa-mura Village*
and Nakazato-mura Village, Damaged by the Mt. Fuji Hoei Eruption (65)

NEMOTO, Sachiko and KOMIYA, Masaaki:

The Dairy of Matudaira Mikinosuke During Stay in Edo

— From Intercalary May 9, Keiō 1 (1865) to August 11 — (77)

KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM
OF CULTURAL HISTORY

Naka-ku Yokohama, Japan

2020